

『太上洞玄靈寶眞一勸誡法輪妙經』 訳注ノート

『法輪妙經』読書会（林佳恵・浅野愛）

一 はじめに

本稿は、二〇二一年から二〇二二年にかけて、林佳恵・浅野愛両名で行った『太上洞玄靈寶眞一勸誡法輪妙經』（HY三四六、以下、『法輪妙經』Aと略す）の読書会で作成した訳注ノートをまとめたものである。（読書会は、新型コロナウイルス感染流行の為、メール等を介した、一種の紙上読書会の形式で行った。）本稿の作成は、主として林が学位請求論文執筆中に作成した經典研究ノートを基に、經典の訓読・現代語訳の草稿を作成し、注釈については、主に道教の用語や事柄については林が、仏教からの借用である用語については浅野が担当し、これらの訓読・訳・注釈を両名で検討し、修正・補足した後、林が本稿を作成した。（最終的に、この訳注ノートの文責は林にある。）

文献の訳注を敢えて訳注ノートとしたのは、今回行った注釈の中には、今後、更に靈宝経研究が進むと、修正・補足を要する部分が出てくる可能性が考えられること、また、幾つかの注釈は問題提起的内容となり、現時

点では今後の研究成果を待つものであることが、その理由である。これは、(管見の限り)現時点での靈宝經研究が、個々の經典について、その内容の詳細な部分にまで立ち入る研究が十分に尽くされている、とはまだ言えない状況にある為である。そのような状況に鑑みて、微力ながら、今後の個々の靈宝經典研究の足掛かりとなるような基礎的作業として、また、諸先生方のご教示を仰ぐべく、今回、読書会の成果をまとめたものを公開するにととした。

(凡例)

一、底本は、文物出版社・上海書店・天津古籍出版社聯合印影『正統道藏』(中国、一九八七年)及び新文豐出版公司編輯『正統道藏』(台湾、一九七七年)所収の『太上洞玄靈寶眞一勸誡法輪妙經』を用いる。

一、敦煌文書。ペリオ二八六一の二・ペリオ二二五六中に保存されている靈宝經の目録(以下、敦煌本「靈宝經目録」と呼ぶ)著録の「舊目」名『法輪罪福』、「卷目」名『太上洞玄靈寶眞一勸誡法輪妙經』の現行テキストは、『正統道藏』中、『太上洞玄靈寶眞一勸誡法輪妙經』(HY三四六)、『太上玄一眞人說勸誡法輪妙經』(HY三八八)、『太上玄一眞人說三途五苦勸戒經』(HY四五五)、『太上玄一眞人說妙通轉神入定經』(HY三四七)の四篇に分収されている(小林正美『六朝道教史研究』(創文社、一九九〇年)第二篇第三章四を参照)。本稿では、この四篇を道藏本『法輪妙經』と総称する。また、現行本に限らず、この經典について述べる場合は、『法輪妙經』と呼ぶ。

一、四篇の道藏本『法輪妙經』については、それぞれ以下の略称を用いる。

太上洞玄靈寶眞一勸誡法輪妙經(HY三四六)：『法輪妙經』A

太上玄一眞人說勸誡法輪妙經(HY三四八)：『法輪妙經』B

太上玄一眞人說三途五苦勸戒經(HY四五五)：『法輪妙經』C

太上玄一眞人說妙通轉神入定經(HY三四七)：『法輪妙經』D

一、『法輪妙經』は、『無上秘要』(HY一一三〇)、『道典論』(HY一一二二)、『上清同類事相』(HY一一二四)、『三洞珠囊』(HY一一三一)、『要修科儀戒律鈔』(HY四六三)等に引文が見える。但し、『無上秘要』以外は、短い引用がほとんどである。訳注作業では、『正統道藏』所収の道藏本『法輪妙經』のテキスト四篇を基として、北周当時に行われていた『法輪妙經』のテキストの一部を保存する『無上秘要』の引文を参照するが、基本的に校訂は行わず、特に底本のテキストと著しい相異が認められる場合は、その箇所を示すに留める。語釈、注釈に当たっては、先ず道藏本『法輪妙經』四篇中の用例等を分析し、更に必要に応じて、主として魏晉南北朝の他の道教經典の用例等も参照する。

※注釈作成に当たり、参照した主要な参考図書：『道教大辞典』(李叔還編纂、台湾、巨流圖書公司、一九七九年)、『道教事典』(野口鐵郎・坂出祥伸・福井文雅・山田利明編、平河出版社、一九九四年)、『中華道教大辞典』(胡孚琛主編、中国、中国社会科学出版社、一九九五年)

一、敦煌文書中に、『太上洞玄靈寶眞一勸誡法輪妙經』の残簡(スライム一六〇五)が現存する。これは、『法輪妙經』Bの巻末部分から『法輪妙經』C(敦煌本では『太上玄一第二眞人光妙音說三途五苦生死命根勸戒上

『法輪妙経』となつてゐる)に当たる部分を保存する。本稿は、『法輪妙経』Aの訳注ノートであるので、今回、この敦煌本は用いないが、今後、『法輪妙経』B及び『法輪妙経』Cの訳注作業に当たつては、この敦煌本も参照する予定である。但し、『法輪妙経』Aと同じく、基本的に校異、校訂は行わない。

一、本稿では、読書会進行の便宜上、全六丁から成る『法輪妙経』Aを、十区分し、それにテキスト1からテキスト10まで番号を振り、区分した部分ごとに訓読・訳注を加えた。『法輪妙経』Aは、以下のように区分した。

テキスト1…一丁表～二丁表2	テキスト2…二丁表2～9
テキスト3…二丁表9～三丁表1	テキスト4…三丁表2～9
テキスト5…三丁表10～三丁裏7	テキスト6…三丁裏8～四丁表9
テキスト7…四丁表9～四丁裏10	テキスト8…五丁表～五丁裏1
テキスト9…五丁裏2～9	テキスト10…五丁裏10～六丁表

(※補足) 林が二〇二一年春に目を負傷し、現時点(二〇二二年冬)でもその後遺症があり、細かい文字の識別などがやや困難な為、原稿の文字校正作業を三瓶はるみ氏(現某出版社編集部勤務…お茶の水女子大学大学院博士後期課程単位取得中退)にご協力頂いた。同氏からは、新型コロナウイルス感染の流行により、大学図書館の利用が難しかった時期に、訳注作業に必要な文献資料も幾つか提供して頂いた。この場を借りて感謝の意を表し

たい。

二、太上洞玄靈寶真一勸誡法輪妙經 (法輪妙經A、HY三四六) 訳注

〔法輪妙經A・テキスト1の1…一丁表7〜一丁裏1〕

太上高玄太極三宮法師玄一真人⁽¹⁾、說太上洞玄靈寶真一勸誡法輪妙經⁽²⁾。

舊文⁽³⁾藏於太上六合玄臺⁽⁴⁾。典經皆龍華玉女・金晨玉童、散華燒香、侍衛靈文。依科四萬劫一傳⁽⁵⁾。太上有命、使付太極左仙公也⁽⁶⁾。

〔法輪妙經A・テキスト1の1訓読〕

太上高玄太極三宮法師玄一真人、太上洞玄靈寶真一勸誡法輪妙經を説く。

舊文は太上六合玄臺に藏す。典經は皆な龍華玉女・金晨玉童にして、散華し燒香し、靈文に侍衛す。科に依り四萬劫に一傳す。太上命有り、太極左仙公に付せしむるなり。

「法輪妙経 A・テキスト1の1現代語訳」

太上高玄太極三宮法師玄一真人が、『太上洞玄靈寶眞一勸誡法輪妙経』を解説する。

「舊文」すなわち天上来にある『太上洞玄靈寶眞一勸誡法輪妙経』は、天上来の太上六合玄臺に收藏されている。その經典を管理する者は皆な龍華玉女・金晨玉童であり、散華し焼香し、靈文（『太上洞玄靈寶眞一勸誡法輪妙経』）の側近く控えて護っている。天上来の決まりに依り（この經典は）四万劫に一度伝授される。（それを太上（大道君※）が命じて、太極左仙公に付授させたのである。

（※）こゝでの「太上」が「太上大道君」であることについては、本稿の注（5）を参照のこと。）

「法輪妙経 A・テキスト1の1語釈・注釈」

○冒頭のテキスト1の部分は、内容から三つに分けられる。「1の1」の部分で、この經典が葛玄（經典中では「太極左仙公」）に伝授されたものであることが説明される。「1の2」の部分では、葛玄の山中での修行の様子と、「上聖」と表現される天真が葛玄に降ったことを述べる。「1の3」の部分では、正月の庚寅の日の夜に、天台山で修行を続ける葛玄のもとへ、大勢の仙童玉女を伴い、天真（三人の太上玄一真人）が降ったことを述べる。なお葛玄については、原則として、経文とその訓読、訳文では「仙公」、「太極左仙公」等、原文の表記を用いるが、注釈部分では、「葛玄」に統一して表記する。

○冒頭部分の一丁裏2〜9までの部分を、『無上秘要』（HY一三〇）卷四七「齋戒品」に、『洞玄眞一勸戒法輪

妙經』として引く。但し、『無上秘要』では、一丁裏9行目の「天真煒燦」の四字を欠く。

(1) 太上高玄太極三宮法師玄一真人…この經典中、葛玄に『法輪妙經』を伝授する三師となる、太上玄一第一真人鬱羅翹、太上玄一第二真人光妙音、太上玄一第三真人眞定光の三真人を指す。神塚淑子氏は、この三人の真人はその呼称から、太極宮の真人であることが示されており、太上玄一三真人もまた「太極真人」として考えられていた、と指摘する。(同氏『道教經典の形成と仏教』(二〇一七年、名古屋大学出版会)、第一篇第三章「靈宝經に見える葛仙公」の一、一一、三参照。)他に、この三人の真人に言及する比較的最近の先行研究としては、謝世維氏の『天空之文―魏晋南北朝靈寶經典研究』(二〇一〇年、台湾商務印書館)、第四章の五「太上玄一三真人」がある。

(2) 法輪妙經…『法輪妙經』は、敦煌本「靈宝經目錄」(ペリオ二八六一の二十ペリオ二二五六)に著録されており、篇目名は『法輪罪福』となっている。(※この目錄に著録されている靈宝經を、それ以外の靈宝經と區別して、「古靈宝經」と呼ぶことが多い。本稿でもそれに倣う。)この経題中の「法輪」は、仏教では「仏の教え」のことであり、仏の教えが衆生の煩惱を打ち碎き、また次々と人々に伝わることを、「輪(チャクラ)」という古代インドの戦車の車輪、或は古代インドの円盤状の武器に喩えたものであり、初期の仏教美術では、浮彫などに仏陀が車輪の形で表現されているように、仏及び仏教の象徴である。道教では、この「法

輪」を「道の教え」の意味で借用している。道教文献中の「法輪」についての言及として、『法輪妙経』Cに「吾故於虚無、無形之中、爲諸來生、上開八門、以爲法輪、教化愚蒙（吾故に虚無に於いて、無形の中、諸々の來生が爲に、上八門を開き、以て法輪と爲し、愚蒙を教化す）」云々（二丁表）とある。また、古靈宝経のひとつ、『元始無量度人上品妙経四註』（HY八七）卷三、二二丁裏の嚴東注に、「東曰、八門者、天開八方法輪之門也。中有罪福之場也。太上道君、開於八門、以度學者生死之魂也。故曰法輪（東曰ふ、八門とは、天の八方法輪の門を開くなり。中に罪福の場有るなり。太上道君、八門を開き、以て學者生死の魂を度すなり。故に法輪と曰ふ。）」と見える。その本文中に『法輪妙経』についての言及はないが、同卷二三丁表の嚴東注には「東曰、法輪之門、罪福之場、各有禁誡。罪福所由、具在法輪經中（東曰ふ、法輪の門、罪福の場、各々禁誡有り。罪福の由る所、具さに法輪經中に在り。）」とある。

(3) 舊文・具体的には、『法輪妙経』を指すと解釈される。『法輪妙経』Bの六丁裏に「此文與元始同生（此文元始と同一生ず）」とあり、『法輪妙経』が天上界にはるか昔から存在する經典であることを述べる。このことから、太古より天上界に存在するという意味で、『法輪妙経』に対して「舊文」という語を用いていると考えられる。なお、靈宝經典中の「舊」の語の用法については、林佳恵『六朝江南道教の研究―陸修静の靈宝経観と古靈宝経』（早稲田大学エウプラクシス叢書16、早稲田大学出版部、二〇一九年）の第4章第5節を参照のこと。

(4) 太上六合玄臺…『法輪妙経』が収蔵されている天上界の場所。『法輪妙経』Aの五丁表（テキスト8）に

「此經高妙、太上所重、藏之六合紫房之内」とあり、天上界での『法輪妙經』収蔵場所とされている「六合紫房」と「太上六合玄臺」は、同じ場所として考えられているようである。なお、『法輪妙經』Dには「其文秘於太上紫微宮中（其の文太上紫微宮中に秘し）」云々（八丁裏）とあり、「太上紫微宮」中に經典が秘蔵されていることを述べている。このことから『法輪妙經』収蔵場所の「太上六合玄臺」或いは「六合紫房」は、紫微宮中に在る場所と考えられていたと見られる。また、經典が天上界の特定の場所に保管され、それを玉女玉童などの神仙が侍衛するという発想は、上清經にも散見する。例えば、『太上玉珮金璫太極金書上經』（HY五六）に「以玉清三元之章付仙都左公、侍仙羽郎、藏太素瑤臺。又命北寒金臺龍華玉女、白空虞宮西靈玉童各三百人、典香執巾、侍衛靈眞（玉清三元の章を以て仙都左公、侍仙羽郎に付し、太素瑤臺に藏す。又北寒金臺の龍華玉女、白空虞宮の西靈玉童各三百人に命じ、香を典（つかさど）り巾を執り、靈眞に侍衛せしむ）」（二丁裏）とあり、經典（靈眞）は玉童・玉女に侍衛されている。また、『洞眞太上紫度炎光神元變經』（HY一三二）では、「高上玉皇、命金晨玉童・西華玉女各三千人、侍文左右、衛在太上六合紫房之内（高上玉皇、金晨玉童・西華玉女各三千人に命じ、文の左右に侍し、太上六合紫房の内に衛在せしむ）」（一丁表）とあり、經典（文）が玉童・玉女に護られて「太上六合紫房」に在ることが見える。

(5) 太上…『法輪妙經』Aでは、「太上」を冠する神格が、「太上大道君」と「太上虚皇」の二つ見える。この經典の二丁裏（テキスト3）に、三人の「玄一真人」の降臨以前、「太上」の命により、「太極真人徐來勒」が葛玄に降臨したことを述べている。古靈宝經のひとつ、『太上洞玄靈寶本行宿緣經』（HY一〇六）、『太極

左仙公請問經』の卷下に該当)では、「(太極) 真人答言、我昔受之太上大道君(真人答へて言ふ、我昔之を太上大道君に受く)」「云々(七丁表)とあり、太上大道君と太極真人徐來勒の間に伝授の系譜に於ける師弟関係が見えることから、『法輪妙経』Aで「太極真人徐來勒」に命を下す「太上」も、「太上大道君」を指すと考えられる。また『法輪妙経』Aでは、『太極左仙公請問経上』(スタイン一三五一、『太極左仙公請問経』の卷上に該当)や『太上洞玄靈寶本行宿縁経』などに見える「太上大道君↓太極真人徐來勒↓葛玄」という伝授の系譜に加えて、新たに「太上大道君↓玄一真人(三師)↓葛玄」という伝授の系譜を示す。(※靈宝経の伝授の系譜については、神塚淑子(注釈(1)前掲書)『道教経典の形成と仏教』第一篇第三章「靈宝経に見える葛仙公」参照。葛玄と太極真人徐來勒、太上玄一三真人の関係については、謝世維(注釈(1)前掲書『天界之文』第四章四、五を参照。)

(6) 太極左仙公…三国時代の呉の神仙家、葛玄のこと。字は孝先。『抱朴子』の著者葛洪の従祖父。古靈宝経では太極左仙公という天上界の法位を拝した高位の仙人として描かれる。しかし、陶弘景はその「呉太極左宮葛仙公之碑」(『華陽陶隱居集』(HY一〇四四)卷下所収。なお、『陶弘景集校注』(王京州校注、上海古籍出版社、二〇〇九年)一五八頁には、同碑文は『呉太極左仙公葛公之碑』の題名で収められている)で、世間の伝承で葛玄は左仙公の位を授けられたとされていることについて、「俗中経傳所談云、「已被太極銓授、居左仙公之位」。如『眞誥』并『葛氏舊譜』、則事有未符(俗中の経傳の談ずる所に云ふ、「已に太極の銓授を被り、左仙公の位に居る」、と。『眞誥』並びに『葛氏舊譜』の如きは、則ち事の未だ符せざる有り)。(七

丁裏」と述べ、陶弘景は『真誥』等の記述に照らして、これに疑問を呈している。また、『真誥』(HY10) 一〇) 卷十二「稽神樞第二」には、楊羲が得た神託に「今正得不死而已、非僊人也(今正に不死を得るのみ、僊人に非ざるなり)」「(三丁表)、即ち葛玄は不死を得たのみとあり、陶弘景は葛玄について「便是地仙耳。靈寶所云太極左仙公於斯妄乎(便ち是れ地仙なるのみ。靈寶の云ふ所の太極左仙公は斯に於いて妄なるか)」「(三丁裏)、即ち、葛玄は地仙でしかなく、それを太極左仙公とするのは靈寶經の所伝に過ぎないと記している。ボーケンキャンプ(S.R.Bokenkamp)氏は、当時の茅山の神降ろしにおいて告げられた葛玄の神仙界での地位の低さから、葛玄の天上界での地位を向上させるという目的が、葛氏の中で靈寶經造經運動の動機のひとつとなった可能性を指摘する。(一九八三年の同氏論文「Source of the Ling-Pao Scriptures」; M.Strickmann ed, *Tantric and Taoist Studies*, vol.2, Bruxelles, pp.434-479 の四四二頁を参照。)

道藏本『法輪妙經』の内容を見るに、これは葛玄が太極左仙公となる経緯を記す經典であり、この經典編纂の目的のひとつは、天上界に於ける葛玄の太極左仙公という地位の正統性の主張にあると見ることができ

〔法輪妙經 A・テキスト1の2：二丁裏2〜7〕

太極左仙公於天台山、静齋拔罪、燒香懺謝、思眞念道。⁽⁷⁾ 一百日中、神明髣髴於空玄之上、雲景燦燦、若存若亡、或分或集、曲映齋堂。⁽¹⁰⁾ 仙公自覺苦徹、退感天真。於是研思玄業、志勵殊勤。齋未一年、遂致感通、上聖垂降、曲

盼うと幽房。

〔法輪妙經 A・テキスト 1 の 2 訓読〕

太極左仙公は天台山に於いて、静齋し拔罪し、燒香し懺謝し、眞を思ひ道を念ず。一百日中、神明は空玄の上に髻髻とし、雲景かがや煒きらめき燦きらめき、若しは存し若しは亡じ、或は分れ或は集ひ、齋堂を曲映す。仙公自ら苦の徹するを覺へ、遐かに天真に感ず。是に於いて玄業を研思し、志し勵みて殊らに勤む。齋すること未だ一年せざるに、遂に感通するを致せば、上聖垂降し、幽房を曲盼す。

〔法輪妙經 A・テキスト 1 の 2 現代語訳〕

太極左仙公は天台山で、静齋し罪をあがない、燒香して過去の過ちを悔い改め、眞道を思念する（瞑想の）修行を行っていた。そのようにして百日になるうちに、あらたかな神の姿が天空の上にほのかに見えるようになり、雲の光があかあかと煒かがやき、現れたり消えたりし、或いは分れたり集ったりして、（仙公のいる）齋堂を隅々まで照らした。（すると）仙公は自然と苦しみを取り除かれるのを覚え、はるかに天真と心を響き合せた。そこで奥深い（道の）わざの本質を見極めんと仔細に考え、修行の達成を目指して励み、とりわけ精を出して修行した。齋を行って一年経たないうちに、遂に道と感応して心が通じると、上聖（上位の天真）が降りて来て、薄暗い齋室を隅々まで見渡した。

〔法輪妙経A・テキスト1の2語釈・注釈〕

- (7) 天台山…中国浙江省東部にある、海拔一一三六メートルの山。西暦五七五年に、仏僧の智顛が入山して天台宗を開き、この地を根本道場としたことで、仏教の中心地となるが、それ以前は道教の靈山とされてきた。『天台山志』(HY六〇三)の宮觀の項に、「赤鳥二年、太極左仙翁葛玄、即此煉丹。故今觀前有朝斗壇(赤鳥二年、太極左仙翁葛玄、即ち此に丹を煉る。故に今觀前に朝斗壇有り)」(八丁表裏)と見え、天台山で葛玄が煉丹を行ったという伝承を記す。『法輪妙経』Aでも、天台山中で修行している葛玄のもとに、三人の真人が降下し、教法を伝授する。また、天台山で葛玄が弟子たちに經典伝授を行ったことが、『太上太虚上真人演太上靈寶威儀洞玄眞一自然經訣』(以下、『自然經訣』)の、現存する三件の敦煌文書の内、ペリオ二四五二に見える。これらのことから、天台山が葛玄(太極左仙公)と関係の深い場所とされてきたことが窺える。なお、『自然經訣』(ペリオ二四五二)、『太上洞玄靈寶智慧本願大戒上品經』(HY三四四)等の他の古靈寶經に見える、葛玄が修行したり、天真の降臨を受けたりした場所については、天台山であったり、会稽上虞山であったりするが、いずれも東晋当時の揚州会稽郡一帯にある場所になっている。
- (8) 思眞念道…『三天内解經』(HY一九六)にも「思眞念道」の表現が見える。卷下一丁表に「人皆由道氣而生、失道氣則死。故使思眞念道、堅固根本、不失其源(人は皆な道氣に由りて生れ、道氣を失へば則ち死す。故に眞を思い道を念じ、根本を堅固にし、其の源を失わざらしむ)」と見え、この「思眞念道」が生命の根源である道氣を堅固にして失われないようにする修行法であることがわかる。更にこの後に「…(前

略) 而況眞道求靈降者乎 (而るに況んや眞道もて靈の降るを求むる者においてをや) (二丁裏) とあり、「思眞念道」、即ち「眞道」を思念することが降靈を求める修行法であると考えられていることがここから看取される。そこで改めて『法輪妙経』Aの「思眞念道」について見てみると、これを百日続けた結果、あらたかな神の姿が天空にほのかに見え、天真を感じるようになり、その後、更に修行に励むと、天真が葛玄のもとに降臨して来たことが記されている。また、「静齋拔罪、焼香懺謝、思眞念道」と表現される葛玄の修行に関しては、他の古靈宝經典においても同様の表現が、例えば『太上洞玄靈寶本行因縁経』(HY一一〇七)に「仙公登勞盛山、静齋念道(仙公勞盛山に登り、静齋念道す) (一丁表) と見え、これらの靈宝經典成立当時の修行の具体的な内容として、山中で齋戒し、存思する、という宗教的実践行為が行われていたことが窺える。

(9) 一百日中・葛洪の『抱朴子・内篇』(HY一一七七)では、百日間の潔齋を行うことを述べる。即ち、卷四「金丹篇」に「合丹、當於名山之中、无人之地、结伴不過三人。先齋百日、沐浴五香、致加精潔(丹を合するに、當に名山の中、无人の地に於いてし、伴を結ぶに三人を過ぎざるべし。先に齋すること百日、五香に沐浴し、精潔を加ふるを致す)云々」(中華書局『抱朴子内篇校釈』七四頁)、また「必入名山之中、齋戒百日、不食五辛生魚、不與俗人相見、爾乃可作大藥(必ず名山の中に入り、齋戒すること百日、五辛生魚を食らはず、俗人と相ひ見ざれば、爾して乃ち大藥を作るべし) (同書、八四〇八五頁)とあり、身を清める潔齋の期間として、百日という時間が必要であると考えられていたようである。『法輪妙経』Aの「静齋拔罪、

焼香懺謝、思眞念道」という修行についても百日という期間が見えるのは、『抱朴子』に見えるような潔斎期間の考え方と無関係ではないと思われる。

(10) 曲映齋堂…ここでは「曲映」をつぶさにてらすという字義から、齋堂の中を隅々まで照らす、という意味に解釈した。

(11) 上聖垂降…『法輪妙経』Aの四丁表(テキスト6)に「上清三洞寶經」を得ると、「高仙」や「上聖」、「十方導師」になることができると述べており、「上聖」が天上界の高位の神仙とされていることが窺える。そこで、ここでは「高位の天真」と訳した。この「上聖」は、降って来て「曲映幽房」したと記されており、『法輪妙経』A(テキスト10)で葛玄が太上玄一真人について、「窺映幽谷、降教眞道」と述べていることから考えると、太上玄一真人を指している可能性が高い。また、諸先学もそのように解釈しているようである。(王宗昱『《道教義樞》研究』(二〇〇〇年、上海文化出版社)、第二章第四節(二)三宝変相、及び神塚淑子(注釈(1)前掲書)『道教經典の形成と仏教』第一篇第三章「靈宝經に見える葛仙公」参照。)なお、『無上秘要』(HY一三〇)巻四七、齋戒品に『洞玄眞一勸誡法輪妙経』として引く部分では、「上聖垂降」の「垂」の字を「汪」に作るが、天真が天上から葛玄のもとへ降って来るといふ文脈から考えて、この箇所では、現行『正統道蔵』本の、上から下への動きを示す「垂」の字で解釈した。

(12) 曲映幽房…「曲映」の「曲」は、「曲映」の用法と同じく、「つぶさに、隅々まで」の意味で用いられている。「幽房」は「齋堂」と同じく、葛玄が修行している場所を指す。

〔法輪妙經A・テキスト1の3…二丁裏7～二丁表2〕

以元正之月⁽¹³⁾庚寅日夜、忽有飛雲丹霄八景玉輿⁽¹⁴⁾、寶蓋洞曜、流煥太無⁽¹⁵⁾、燒香散華、浮空而來。千乘萬騎、天真燁燁、不可稱焉。龍飛鸞鳴、鳳翔翩翾、獅子白鶴、嘯歌邕邕⁽¹⁶⁾。仙童玉女各數千萬人、手把命魔之節・十絶華旛⁽¹⁷⁾、結駟⁽¹⁸⁾、蒨鬱靈軒⁽¹⁹⁾。一時之頃、天真並下。

〔法輪妙經A・テキスト1の3訓読〕

元正の月庚寅の日の夜を以て、忽ち飛雲丹霄に八景の玉輿有り、寶蓋洞曜し、太無に流煥し、燒香し散華し、空に浮きて來たる。千乘萬騎、天真は燁き燁き、焉を稱ぐるべからず。龍は飛び鸞は鳴き、鳳の翔ぶこと翩翩として、獅子白鶴、嘯歌すること邕邕たり。仙童玉女各々數千萬人、手に命魔の節・十絶の華旛を把り、駟に騁騎を結び、蒨鬱たる靈軒あり。一時の頃、天真並び下る。

〔法輪妙經A・1の3現代語訳〕

正月の庚寅の日の夜、にわかになびく美しい雲の間から八景の玉輿が出現し、その美しい覆いは光り輝き、光のきらめきを天上の太無の空間に流し、焼香し散華しながら、空中に浮かんでやって來た。(天界の)千乘萬騎(の者たち)、(それをひきつれた)天真はあかあかとかがやき、その数は数えることが出來ないほどであった。(あたりには)龍が飛び鸞が鳴いて、鳳が翔ぶさまは軽々として、獅子や白鶴は、おだやかに声を細く長く引

て歌っていた。仙童玉女各おの数千万人は、手に命魔の節・十絶の華幡を持ち、駿馬を四頭立ての馬車に繋ぎ、雲が立ち込める中にあらたかな神々の乗る車があった。一斉に、天真たちが降って来た。

『法輪妙経 A・テキスト1の3…語釈・注釈』

- (13) 元正之月…正月。元正は一年の最初の日、一月一日のこと。『太上洞玄靈寶本行因縁経』(HY-1107)にも、「吳赤鳥三年、歳在庚申、正月一日壬子。仙公登勞盛山、靜齋念道(吳赤鳥三年、歳は庚申に在り、正月一日壬子。仙公勞盛山に登り、靜齋念道す)」「(二丁表)とあり、仙公が元旦に山に登り、そこで齋戒し存思する修行をしたことを述べる。
- (14) 飛雲丹霄八景玉輿…「飛雲丹霄」は、はらかな天空の雲の表現である。「雲霄」の美辞であるので、ここでは「たなびく美しい雲」と訳した。「八景玉輿」は天上界の乗り物。『法輪妙経』Aの四丁表(テキスト6)にも同じく天上界の乗り物として、「八景龍輿」が見える。「八景玉輿」は、他にも例えば古靈宝経のひとつ、『洞玄靈寶二十四生圖経』(HY-1396)三丁表に、元始天王と後聖李君が同乗する乗り物として見える。
- (15) 流煥太無…ここでの「太無」は、文脈からその用法を見るに、「流煥」即ち光の輝きを流す空間の表現として用いられている。「太無」は、道教の宇宙生成論の展開の中では宇宙生成の一段階を示す語として見えるが、『法輪妙経』Bにも、「遊宴五嶽、逍遙太無(五嶽に遊宴し、太無に逍遙す)」「(二丁表)とあり、『法輪妙経』では「太無」は、宇宙生成過程の一段階を示す語としてではなく、五嶽即ち地上と対応する空間であ

る天上、天空を指すと考えられる。「太無」がこのような天界の空間を示す用例は、『法輪妙経』独自のものではなく、他の古霊宝経でも、例えば、『元始五老赤書玉篇真天文書経』(HY二二)巻上に「三景合明、神霄煥爛、流盼太無(三景命を合し、神霄煥爛し、太無に流盼す)」(五丁表)とあり、「流煥太無」と同様の表現をしている。また、『太上靈寶諸天内音字自然玉字』(HY九七)巻二の「顕定極風天音玉訣第三」には、「天皇真人曰、修飛仙之道、…(中略)…、當有三色之雲、迎子上昇景皇之庭、逍遙太无之中、位爲景霄真人也(天皇真人曰く、飛仙の道を修むるに、…(中略)…、當に三色の雲有り、子を迎へ景皇の庭に上昇し、太无の中を逍遙し、位は景霄真人と爲るべし)」(八丁表裏)とあり、『上清太極隱注玉經寶訣』(HY四二五)にも、「修之必神仙。當復何所欲。文耀太無間、煥然而玄郁(之を修せば必ず神仙たり。當に復た何ぞ欲する所あらん。文は太無の間に耀き、煥然として玄郁なり)」(三丁表)とある。これらの例でも「太無」は空間を表す語として用いられている。上清経でも「太無」について、例えば『洞真太上紫度炎光神元變経』(HY一三三二)に、「五帝自生夜燭神燈通光靈符、生於虛空之内、神光玄照、煥落太无(五帝自生夜燭神燈通光靈符は、虚空の内に生じ、神光玄照し、太无を煥落す)」(三三丁表)、『上清紫精君皇初紫靈道君洞房上経』(HY四〇五)に「上登玉清、洞遊太無(玉清に上登し、太無に洞遊す)」(十八丁表)とある。なお、宇宙生成論に見える「太無」については、麥谷邦夫氏に、以下のような先行研究がある。同氏論文「道教的生成論の形成と展開」、『中哲文学会報』第四号、一九七九年、及び小野澤精一、福永光司、山井湧編『氣の思想』(東京大学出版会、一九七八年)第二部第二節「道家・道教における氣」(麥谷邦夫執筆)。ま

た、注(43)参照のこと。

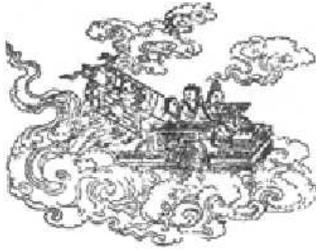
(16) 龍飛鸞鳴、鳳翔翩翩、獅子白鶴、嘯歌嗚嗚：「鸞」は鳳凰の一種で、鷄に似ていて、羽は赤い地に五色を混ぜたような色で、中国の伝統音階・施法の基本である五つの音、宮、商、角、徵、羽の五音の律に合った声で鳴くとされる。「獅子白鶴、嘯歌嗚嗚」という表現は、例えば『洞玄靈寶二十四生圖經』(HY一三九六)の三丁裏などにも見える。「嘯歌」は声を細く長く引いて歌を歌うこと。「嗚嗚」は、穏やかなさま、和らぐさまを表す。

(17) 命魔之節・十絶華幡：「節」は旄牛の尾で飾った旗印で、古代中国で天子から大将、使臣等に賜るもの。「幡」も旗の一種で、長く垂れ下がった旗、またはのぼり。古靈宝経のひとつ、『太上洞玄靈寶真文要解上經』(HY二三三〇)の冒頭にも、「十方至眞、自然妙行眞人、飛仙、大聖衆、皆浮空、燒香散華、旋行一日三周、手把十絶華幡、口誦洞章(十方至眞、自然妙行眞人、飛仙、大聖衆、皆な空に浮き、燒香し散華し、旋行すること一日に三周、手に十絶華幡を把り、口に洞章を誦す)」「(二丁表)とあり、太上靈寶治玄都玉京山の七寶玄臺で、真人や飛仙が手に「十絶華幡」を持つて洞章を口誦しながら旋行する情景が記されている。「命魔之節」、「十絶華幡」という旗印の名称は、それが人間界の旗印ではなく、天上界の旗印であることを示すものとして発想されたことが窺える。ここでは、天上の使者である天真が、「命魔之節」や「十絶華幡」といった、天上界の莊嚴且つ華やかな旗印やのぼりを手にした無数の仙童玉女を伴として引き連れて降臨する威風堂々たる情景をイメージしたものであろう。

(18) 結駟驎騎：「駟」は四頭立ての馬車のこと。「驎」は駿馬。「騎」は乗馬用の馬のこと。ここでは乗馬用の駿馬を四頭立ての馬車に繋ぐ意味に取った。

(19) 翦鬱靈軒：「翦鬱」は、雲や霧が盛んに立ち込めるさま。「靈軒」の「軒」は、轅が曲がって高く上に反り上がった形の車で、古代中国では大夫以上の貴人が乗る車。「靈」には神のようなあらたかな、或はめでたいという意味があり、「靈軒」はあらたかな神々の乗る天上界の乗り物、という意味が込められた天上界の車の名称と考えられる。ここで「翦鬱靈軒」という表現でイメージされている天上界の乗り物は、例えば、『正統道蔵』に収められている『上清八道秘言圖』（HY四三〇）の初めの部分に見える「龍軒羽蓋」の図が近いかもしれない。『上清八道秘言圖』では天上界の乗り物である「龍軒羽蓋」として、轅が上に反り上がった車が天真を乗せて雲の上に乗る図が描かれている。

左図：『中華道蔵』巻一、『上清八道秘言圖』より（張繼禹主編、華夏出版社、二〇〇四年）二四五頁）



〔法輪妙經A・テキスト2…二丁表2く9〕

第一自稱太上玄一第一真人鬱羅翹。第二自稱太上玄一第二真人光妙音。第三自稱太上玄一第三真人眞定光。三眞並集、皆項有圓光、映照十方、悉各坐金牀錦席。左右侍官、皆把華幡、幡百和名香、擎立空青之案⁽²¹⁾・八色之中。請『眞一勸戒法輪妙經』飛文錦帳⁽²²⁾、七寶纓絡玄覆經上⁽²³⁾。靈眞⁽²⁴⁾煒燁於絕空之中。

〔法輪妙經A・テキスト2訓読〕

第一は自ら太上玄一第一真人鬱羅翹と稱す。第二は自ら太上玄一第二真人光妙音と稱す。第三は自ら太上玄一第三真人眞定光と稱す。三眞並びに集ひ、皆な項に圓光有り、十方を映照し、悉く各々金牀錦席に坐す。左右の侍官は、皆な華幡^{かはん}を把^とり、百和の名香を燔じ、空青の案・八色の巾を擎^{ささ}げて立つ。『眞一勸戒法輪妙經』を飛文の錦帳に請ひ、七寶の纓絡もて經上を玄覆す。靈眞は絶空の中に煒燁^{いよう}す。

〔法輪妙經A・テキスト2現代語訳〕

第一の天真は自らを太上玄一第一真人鬱羅翹と称した。第二の天真は自らを太上玄一第二真人光妙音と称した。第三の天真は自らを太上玄一第三真人眞定光と称した。三人の天真が一同に集り、皆なそのうなじには円形の光が有り、(その光は)十方を明るく照らし、いずれもそれぞれ金の牀^{しょう}に錦の席^{むしろ}を敷いた上に坐っていた。左右に侍べる天界の官人たちは、皆な華幡^{かはん}というのぼりを手に持ち、百和の名香をくべ、空青の案と八色の布巾を擎^{ささ}げ

て立っていた。『眞一勸戒法輪妙經』を飛文の文様の錦の帳とばりの上に頂き、七宝の玉をつないだ飾りでその經典の上を空中から覆っていた。靈妙な自然の道（たる經典）は、はるかな空中に光り輝いていた。

【法輪妙經A・テキスト2語釈・注釈】

(20) 三眞・三人の太上玄一眞人については、注釈(1)及び注釈(5)を参照のこと。

(21) 空青之案…「案」は小さな机。「空青の案」というものが、具体的にはどの様なものかは、これだけではよく分からないが、「空青」には「大空、青空」という意味があるので、天上界の道具であることを示す呼称であると考えられる。薬用・顔料に用いる鉱石の「空青」以外の意味で用いられる「空青」の語の用例として、他の古靈宝經では、『太上諸天靈書度命妙經』(HY二三)に、「元始天尊告蒼帝君曰、昔龍漢之年、靈寶眞文於此國土、出法度人。高上大聖時撰出妙經、以紫筆書於空青之林。故風吹此樹、其聲成音。九色之鳥、恒食樹葉、身生文章(元始天尊が蒼帝君に告げて曰く、昔龍漢の年、靈寶眞文此の國土に於いて、法を出し人を度す。高上大聖時ありて妙經を撰出し、紫筆を以て空青の林に書す。故に風此の樹に吹けば、其の聲音を成す。九色の鳥、恒に樹の葉を食せば、身に文章を生ず)」云々(三丁裏く四丁表)とある。また『元始无量度人上品妙經四註』(HY八七)卷二の廠東注に、『三元品戒』の略擧として「昔龍漢之年、玉字始出、…(中略)…、元始因撰作十部妙經、以紫筆書著空青之林(昔龍漢の年、玉字始めて出で、…(中略)…、元始因りて十部妙經を撰作し、紫筆を以て空青の林に書き著はず)。(四丁表裏)とあり、これらの用例では、「空青

の林」は、眞文を敷演して撰作された經を書きつけた樹木の名称となっている。更に上清經の『上清黃氣陽精三道順行經』(HY三三三)にも、「凡後學得仙、莫不經洞陽之宮、受人鍊而昇天也。受鍊過便得食空青之花(凡そ後學の仙を得るに、洞陽の宮を経て、人鍊を受けて昇天せざるは莫きなり。受鍊過ぎれば便ち空青の花を食するを得たり)。(六丁表)、また『雲笈七籤』(HY一〇二六)卷八の「釋三十九章經」第三章に、「玉清天中有樹似松、名曰空青之林。得食其華者、身爲金光(玉清天中に樹の松に似たる有り、名づけて空青の林と曰ふ。其の華を食らふこと得れば、身は金光を爲す)。(三丁表)とあり、これらの用例では、「空青の花」は、受鍊が終わり昇仙する者が食べることのできるものであり、食べると身体に金色の光が生じるといふ靈驗あらたかなものであることが判る。先に引用した『太上諸天靈書度命妙經』でも、紫の筆で經文が書かれた「空青の林」の木の葉は風に吹かれると音曲を奏で、これを常食する鳥はその身体に經文があらわれるとある。「空青の案」という名称は、このような空青の林の樹を連想させ、また、そのようなイメージ上の関わりがある可能性が考えられる。

- (22) 飛文錦帳・「飛文」はデザインや文様の種類と考えられる。衣の文様として「飛文」の表現が見える例には、他に『太平御覽』(HY二二二〇)巻中に『龜山元籙』を引き、「有明光錦九朱飛文法衣、三素飛文錦衣、五色斑衣、九色龍衣。又有青黃紫三色羽衣(明光の錦九朱飛文の法衣、三素飛文の錦衣、五色の斑衣、九色の龍衣有り。又青黃紫三色の羽衣有り)」云々(十一丁裏)とある。

- (23) 七寶纓絡玄覆經上…この「玄」は、何も無い空中のような意味であり、イメージ的には、空中(何かを吊り

下げるようなものが無い場所)から七宝の美しい玉飾りが、經典の上を覆うように浮かんでいるような情景と考えられる。現在の仏教や道教の寺院で、天井から仏像や神像の上にきらびやかな装飾が吊り下げられている様子を見ることができ、具体的にはそのような情景をイメージしたのであろう。

(24) 靈眞…文脈から見ても、ここで虚空に明るく輝いている「靈眞」とは、葛玄に授けられようとする『法輪妙經』を指す、と考えられる。『法輪妙經』Cに、北獄に落ちる罪人の罪行として「或疑毀正文、訾壞寶章、或燒敗天經、輕慢靈眞(或は正文を疑ひ毀ち、寶章を訾り壞し、或は天經を燒敗し、靈眞を輕慢す)」（四丁裏）と述べる。「正文」と「寶章」、「天經」はいずれも經典を指しており、「天經」と対となる「靈眞」も經典を指すと解釈できるので、ここからも『法輪妙經』Aのこの「靈眞」は、經典を指していると考えられる。

〔法輪妙經A・テキスト3…二丁表9…三丁表1〕

於是仙公稽首作禮。天尊妙重、未敢自陳。唯心歡神、暢伏聽戒言。

太上玄一真人鬱羅翹告太極左仙公曰、

「子積劫念行、損身救物、開度有生、惠逮草木。託身林阜、守情忍色、恭禮師宗、存弗厭極、苦志篤厲、乃有至德、致紫蘭臺金闕上清宮有瓊文紫字、功德巍巍、行合上仙。太上命太極真人徐來勒、保汝爲三洞大法師。今復命我、來爲子作第一度師。子可復坐。我當告子「開度法輪勸戒要訣」、使子知有宿命、先身罪福致今之報。於是說

之。子將無欲聞之乎。能奉之者、便當靜聽」。

【法輪妙經A・テキスト3 訓読】

是に於いて仙公稽首し作禮す。天尊は妙重なれば、未だ敢へて自らは陳べず。唯だ心に神を歡び、暢伏して戒言を聽く。

太上玄一真人鬱羅翹が太極左仙公に告げて曰く、

「子は劫を積みて念行し、身を損ひて物を救ひ、有生を開度し、恵みは草木に逮ぶ。身を林阜に託し、情を守り色を忍び、師に恭禮して宗たもとび、存して厭いとひ極むるを弗はひ、苦志すること篤厲なれば、乃ち至徳有り、紫蘭臺金闕上清宮に瓊文紫字有るを致し、功德は巍巍として、行ひは上仙に合す。太上は太極真人徐來勒に命じ、汝を保して三洞大法師と爲さしむ。今復た我に命じ、來りて子が爲に第一度師と作さしむ。子復た坐すべし。我當に子に「開度法輪勸戒要訣」を告げ、子をして宿命有り、先身の罪福今の報ひを致すを知らしむべし。是に於いて之を説く。子將に之を聞かんと欲すること無からんや。能く之を奉ずる者は、便ち當に靜聽すべし」と。

【法輪妙經A・テキスト3 現代語訳】

そこで仙公は額づき（天真たちに）拝礼した。天尊（たる三人の真人）は妙なる尊き存在であるので、（仙公は）敢えて自分の方から話しかけることはしなかった。ただ心は神（の降臨）を歡び、地に伏して（天真の）戒戒の言葉を拝聴した。

太上玄一真人鬱羅翹は太極左仙公に告げて次のように言った。

「そなたは非常に長い時間を積み重ねて瞑想の修行をし、己の身を損つて衆生を救済し、命有るものを悟りに至らせ、その恵みは草木にも及んだ。己の身を深い林に委ね、心の動きを制御し欲望を抑制し、師に恭しく礼を以て対応して敬い、瞑想して（修行を）ひどく厭う心をはらい、苦行して修行の目的達成を志すことに熱心に励んだので、それでこの上ない徳が有るようになり、（天界の）紫蘭臺金闕上清宮には神仙となる者の名を記す天上界の名簿に美しく神々しい文字（で書かれた名前）が有るようになり、その功德はすばらしく高大であり、その行いは上位の天仙（の行い）に合致している。（そこで）太上大道君は、太極真人徐來勒に命じて、そなたを保挙して三洞大法師とした。今復た私に命じ、（私をそなたのもとに）来させて、そなたの為に第一度師とした。そなたは（身を起こして）復た坐るがよい。私はまさにそなたに「開度法輪勸戒要訣」を教えて、そなたに宿命というものがあり、前世の罪や（善行によつて受けた）幸福が今世の報いとなつてゐることを知らしめようと思う。そこでこれ（法輪勸戒要訣）を説く。そなたはまさかこれを聞きたいと思わないということはあるまい。よくこれをつつしんで受けるのであれば、すぐにも静聴するべきである」。

『法輪妙經 A・テキスト 3 語釈・注釈』

○この部分の、「太上玄一真人」から「法輪勸戒要訣」までは、『無上秘要』（HY 一一三〇）卷三四「師質品」に『洞玄法輪經』として引く。『無上秘要』では、二丁裏七行目に見える「太極真人」の名である「徐來勒」

が無く、単に「太極真人」とのみある。

- (25) 天尊…ここでの「天尊」は、「元始天尊」ではなく、天台山中の葛玄のもとに降臨した太上玄一三真人に対して用いられている。『法輪妙経』Aの四丁裏(テキスト7)に、「仙公唯唯、伏受誨命、惟願天尊哀而矜愍」とあり、ここでも葛玄が「太上玄一真人」に対して、「天尊」という呼称を用いている。また、「天尊」は他の古靈宝経でも、「元始天尊」といった特定の神格の略称でなく、対面している天真へ直接呼びかける際の尊称として用いられている例が見える。例えば、『洞玄靈寶二十四生圖經』(HY一三九六)に、後聖李君が元始天王に問いかける場面で、「今遇天尊、喜度難言、願垂成就極其道眞(今天尊に遇ひ、喜度言ひ難し、願はくは其の道眞を極むることを成就するを垂れんことを)」「(三丁裏)と見える。このように古靈宝経に見える「天尊」が、必ずしも「元始天尊」を指すとは限らないことについては、つとに劉屹氏が指摘している(劉屹『六朝道教古靈寶經の歴史學研究』(二〇一八年、上海古籍出版社)第四章第二節『綫索之一…「天尊」與「元始天尊」』参照)。
- (26) 損身救物…「物」は、仏教では衆生、とりわけ人を指す。例えば、梁の慧皎撰『高僧傳』卷十二では、衆生を救済するために自身を犠牲にした僧たちを「斯皆尚乎兼濟之道、忘我利物者也(斯れ皆な兼濟の道を尚び、我を忘れ物を利する者なり)」「(大正蔵五〇卷四〇六頁上)と評する文中、「物」を衆生の意味で用いている。ここでも、仏教と同じく衆生を指す意味で「物」の語が用いられている。

(27) 瓊文紫字…「瓊文」は、『正一法文法籙部儀』(HY一三三三)に、「夫受靈寶開度、不顯於師、則死籍不解。

瓊文無名、徒受寶經、永無傳付、閉塞大法（夫れ靈寶を受け開度するに、師を顯らかにせざれば、則ち死籍解けず。瓊文に名無ければ、徒らに寶經を受け、永く傳付する無く、大法を閉塞し）云々（二三丁表）とあり、ここでは「瓊文」は宝經を受ける資格の有る者の名を記した天上界の名簿のようなものとして考えられている。また、『雲笈七籤』（HY一〇二六）巻七に「琅蚪瓊文」として、「飛行羽經云、金書玉籙乃琅蚪瓊文也（飛行羽經に云ふ、金書玉籙乃ち琅蚪瓊文なり、と）」（十丁裏）とあり、ここでも「瓊文」は「玉籙」、即ち天上界の名簿のようなものとされている。「紫字」については、『上清黃氣陽精三道順行經』（HY三三三）の二十一丁表に記載された符の説明に、「右紫書丹字、月魂隱音、皆書月中南境空青之林、結自然之書也（右紫書丹字は、月魂の隱音、皆な月中南の境の空青の林に書し、自然の書を結ぶなり）」、と見える。この「紫書丹字」については、その前には「丹書紫字、結音空青（丹書紫字は、音を空青に結ぶ）」云々（二十丁裏）とあるように、「丹書紫字」という表現もされていて、「紫書丹字」と言い換えることができるようである。「紫書丹字」は更にあとには、「紫書丹字、結於八素自然之氣（紫書丹字は、八素自然の氣を結ぶ。）」（二二丁裏）とあり、自然の氣から成るものとして考えられていることがわかる。また、「紫字」を「丹字」と言い換えていることから、「紫字」は紫色の文字という意味ではなく、神聖な文字（で書かれたもの）という意味合いで用いられていると推察される。これらを参考にして、現代語訳を試みた。なお、空青の林に自然の書が記されているという設定は、『太上諸天靈書度命妙經』（HY二三三）や、『上清黃氣陽精三道順行經』に記載された符の説明（二十一丁表）にも窺える。注釈（21）を参照のこと。

- (28) 太極真人徐來勒…太極真人という天眞の称号(天界の神仙の位)は、上清経の中にも見えるが、「徐來勒」という名の太極真人は、靈宝経に登場するが上清経には見えない。このことから、「太極真人徐來勒」は靈宝経独自の神格と言える。太極真人徐來勒の名が見える古靈宝経としては、現行・現存のテキストでは、『上清太極隱注玉經寶訣』(HY四二五)、『自然經訣』(敦煌写本。ペリオ二三五六、ペリオ二四〇三、ペリオ二四五二)、『太上洞玄靈寶本行宿緣經』(HY一一〇六)等が挙げられる。これらのテキストで共通することは、太極真人徐來勒が葛玄に教法を伝授し、經典伝授の系譜の上で、葛玄の師となっていることである。『法輪妙経』Aでは、「太上玄一真人」によって語られる過去の話の内容から、「太極真人徐來勒」がかつて葛玄を推挙(保挙)して、彼に「三洞大法師」の法位を受けさせたことが判る。なお、現存する『太極左仙公請問經上』(スタイン一三五一)を見ると、葛玄の師として、「太極真人」ではなく「太上太極高上老子无上法師」、また略称して「高上老子」という神格が登場するが、『太上洞玄靈寶本行宿緣經』を見ると、一丁表に登場する「太極真人高上法師」が自ら「徐來勒」と名乗っており(十三丁裏)、ここから、『太極左仙公請問經上』の「高上老子」が「太極真人徐來勒」であることが判る。徐來勒と葛玄については、注釈(1)に挙げた、神塚淑子氏や謝世維氏の先行研究を参照のこと。
- (29) 保汝爲三洞大法師…「三洞大法師」という法位は、現存する古靈宝経では、訳注者が検索した限りでは道蔵本『法輪妙経』の他、『洞玄靈寶長夜之府九幽玉匱明眞科』(HY一四〇〇)の二十七丁表や二十八丁裏の、儀礼の中で神々に道士が自分の法位を申し上げる箇所に見える。また、「三洞大法師」の他に、「三洞法師」

という法位が『自然經訣』や、『太上洞玄靈寶本行因緣經』(HY一〇七)などに見える。『自然經訣』(ペリオ二四〇三)では、この「三洞法師」について、「仙公曰」として、「靈寶文亦包諸經、可名三洞法師也(靈寶文も亦た諸經を包めば、三洞法師と名づくべきなり)」（『中華道藏』第四卷、九八頁中段）と述べる。更に『自然經訣』(ペリオ二四五二)では、「太上三洞靈寶經法師」（『中華道藏』第三卷、九八頁中段）、「靈寶三洞法師」（『中華道藏』第三卷、一〇〇頁上段）という表記も見える。また、『太上洞玄靈寶本行因緣經』には、「不信大經弘遠之辭、不務齋戒、不尊三洞法師、好樂小乘、故得地仙之道（大經弘遠の辭を信じず、齋戒を務めず、三洞法師を尊ばず、好みて小乗を樂しむ、故に地仙の道を得る）」云々（一丁裏）と見える。（「三洞法師」に言及する近年の主要な先行研究としては、王承文『敦煌古靈寶經與晋唐道教』（中華書局、二〇〇二年）第三章第一節：『古靈寶經與道教』三洞「學說的起源」の四：「古靈寶經與「三洞經書」的傳受儀及「三洞法師」和「三洞弟子」、劉屹（注釈）(25) 前掲書）『六朝道教古靈寶經的歷史學研究』下篇第八章第二節：『古靈寶經中的「三洞說」』等がある。）

(30) 第一度師：『法輪妙經』Aでは、太上玄一三真人がそれぞれ葛玄の度師となり、この三人の度師によって要訣・誡が葛玄に伝授されることが説かれている。また、テキスト7の部分には「太上以子宿勲高重故、命我等爲子三師、度子要訣、以成子道、使子速得飛騰三界、遊乎上清、身詣金闕、受號仙公也。」(四丁裏)とあり、三人の度師(三度師)から教法を伝授されることではじめて、葛玄は太極宮に登り、太極仙公の任を拝することができると説明されている。即ち、この經典では、三師による經訣伝授が、得道昇仙の爲の必須条件

となっており、加えて師（師宝）の存在が重視されている。ここにこの経典の編纂目的が窺える。同時に注目すべきは、三師による経訣伝授以前に「太極真人徐來勒」が下り、「三洞大法師」に保举され、「仙公」となったはずの葛玄に対して、ここでは「太極仙公」に任じられる正式な手続きがまだ完了しておらず、三師による経訣伝授を改めて行う必要があるとしている点である。これは、『法輪妙経』の成書時期と関わるものである可能性が考えられる。

(31) 「法輪勸戒要訣」…道藏本『法輪妙経』四篇のうち、『法輪妙経』Aは、内容から見て『法輪妙経』全体の序に当たると考えられる。この経典中、三真人が各々葛玄に伝授する要訣は、『法輪妙経』B・C・Dとそれぞれ次のように対応している。(神塚淑子(注釈(1)前掲書)『道教経典の形成と伝教』第一篇第三章二を参照。)

第一玄一真人の伝授する「開度法輪勸戒要訣」

…『太上玄一真人説勸誡法輪妙経』(『法輪妙経』B)

第二玄一真人の伝授する「三途五苦生死命根勸誡要訣」

…『太上玄一真人説三途五苦勸誡経』(『法輪妙経』C)

第三玄一真人の伝授する「無量妙通轉神入定勸誡要訣」

…『太上玄一真人説妙通轉神入定経』(『法輪妙経』D)

【法輪妙經A・テキスト4…三丁表2〜9】

太上玄一第二真人光妙音告左仙公曰、

「子轉輪生死、與善結緣、歷劫積稔、代代不休、棄榮委祿、投身幽阜、饑寒嶮嶮、念道不言。欽仰師寶、恒如對神、仁和心柔、坐起欣欣、長齋苦思⁽³³⁾。時不虧間、精感遐徹。故名標上清⁽³⁴⁾。太上命我爲子第二度師。當具告子「三塗五苦生死命根勸戒要訣」、使子知魂神苦痛所從而來。欲聞之乎。吾當爲子說之。子當奉之焉」。

【法輪妙經A・テキスト4訓読】

太上玄一第二真人光妙音が左仙公に告げて曰く、

「子は轉輪生死し、善と縁を結び、劫を歴て稔を積み、代代休まず、榮えを棄て祿を委^すて、身を幽阜に投じ、嶮嶮に饑寒するも、道を念じて言はず。師寶を欽仰し、恒に神に對するが如くし、仁は和^{なご}み心は柔らぎ、坐起するに欣欣とし、長齋苦思す。時に間を虧かず、精^{つまひ}らかに感じ遐かに徹す。故に名は上清に標^{しる}さる。太上我に命じて子の第二度師と爲さしむ。當に具^{もつ}さに子に「三塗五苦生死命根勸戒要訣」を告げ、子をして魂神の苦痛の從りて來る所を知らしむべし。之を聞かんと欲するや不^{いな}や。吾當に子が爲に之を説くべし。子當に之を奉ずべきなり」と。

「法輪妙経A・テキスト4現代語訳」

太上玄一第二真人光妙音は左仙公に告げて次のように言った。

「そなたは幾度も輪廻転生し、善と縁を結び、長い時を積み重ね、転生するごとに（修行を）休むことなく、世俗の榮譽を棄て（役人の）俸禄に見向きもせず、その身を人里離れた場所におき、険しい山中で飢え凍えても、道（の教え）を心に思つて（辛いとは）言わなかった。宝である師を尊敬して慕い、常に神に対するように応対し、その仁徳は和やかで心は溫柔であり、日々の生活を喜んで送り、長齋して色々と思念した。間をあけることなく、はつきりと（天真に）感応して遙か彼方まで心を響かせ応じた。そこで（そなたの）名は上清（宮）にしろされたのである。太上大道君は私に命じて（私を）そなたの第一度師とした。（そこで私は）まさにつぶさにそなたに「三塗五苦生死命根勸戒要訣」を教え、そなたに魂の苦しみ痛みがいつより来るのかを知らしめようと思う。（そなたは）これ（三塗五苦生死命根勸戒要訣）を聞きたいと思うか否か。私はまさにそなたの為にこれを説くのである。そなたもこれをつつしんで受けるべきである」。

「法輪妙経A・テキスト4語釈・注釈」

○この部分の、「太上玄一第二真人」から「三塗五苦生死命根勸戒要訣」までは、『無上秘要』（HY一三〇）巻三四「師質品」に『洞玄法輪経』として引く。

(32) 師寶…道教の三宝のひとつで、道を学ぶ者に教法を伝授する存在である師のことを指す。中国では仏教伝来以前から、大切な事物を「三宝」と呼ぶ例が有った(『老子』六十七章、「我有三寶、持而保之。一曰慈。二曰檢。三曰不敢爲天下先(我に三寶有り、持して之を保つ。一に曰く慈。二に曰く檢。三に曰く敢へて天下の先と爲らず)」。)が、仏教伝来と共に、仏教に於いて最も重要な三つのことを仏・法・僧の「三宝」として尊ぶことが知られると、道教でも仏教に倣った「三宝」を説くようになったとされる。道教の三宝とは、道寶・經寶・師寶をいう。例えば、古靈寶經のひとつ、『太上洞玄靈寶本行宿緣經』(HY1106)に、「言三寶者、道寶太上・經寶・師寶、是爲三寶(三寶と言ふは、道寶太上・經寶・師寶、是れ三寶と爲す)」(十二丁表)と見える。「三宝」についての主な先行研究としては、小林正美『六朝道教史研究』(創文社、一九九〇年)第二篇第一章四、五、六や、王宗昱(注釈(11)前掲書)『《道教義樞》研究』第二章第四節三寶義などがある。また、王氏は同書中、『法輪妙經』を、師寶の教義に関する重要な文献としている。『法輪妙經』Aでは、師を宝として敬い仕えるべきことも、伝授儀の作法等と併せて説かれている。(なお、「師宝」に関する近年の主要な先行研究のひとつとして、金志玟氏の論文「玄師と經師―道教における新しい師の觀念とその展開」、(『三教交渉論叢統編』二〇一一年、京都大学人文科学研究所)がある。)

(33) 長齋：『法輪妙經』Aでは、「長齋」した葛玄に太上玄一真人が降り、彼が太極仙公として登仙する身であることが告げられるが、『法輪妙經』Bに「上士勤尚廣開法門、…(中略)…、長齋苦思、精研洞玄、吐納炁液、…(中略)…、志不退轉、尅成上仙、三師備足、身登太極、位加仙卿(上士勤め尚びて廣く法門を開

き、…(中略)…、長齋苦思し、洞玄を精研し、炁液を吐納し、…(中略)…、志して退轉せざれば、尅く上仙と成り、三師備足せば、身は太極に登り、位は仙卿に加へらる」(二丁表)とあり、『法輪妙経』Cにも「若能長齋、焼香禮拜、廣救萬物、…(中略)…、衆行合法、尅得上仙、坐降雲龍、飛行太空也(若し能く長齋し、焼香し禮拜し、廣く萬物を救ひ、…(中略)…、衆行法に合せば、尅く上仙を得、坐して雲龍を降ろし、太空に飛行するなり)」(九丁表く裏)とあって、「長齋」が上仙となる為の修行のひとつであることが窺える。また、『元始五老赤書玉篇眞文天書經』(HY二二)卷上に「長齋百日、精思靈寶尊神、則天真下降(長齋すること百日、靈寶尊神を精思せば、則ち天真下降す)」云々(三九丁裏)と見え、『三天内經』(HY一一九六)卷下にも「夫爲學道、莫先乎齋。外則不染塵垢、内則五藏清虚、降眞到神、與道合居。能修長齋者、則合道眞、不犯禁戒也(夫れ學道を爲すに、齋より先んずるは莫し。外則ち塵垢に染まらず、内則ち五藏清虚なれば、眞を降ろし神を到らせ、道と居を合す。能く長齋を修むる者は、則ち道眞と合し、禁戒を犯さざるなり)」(二丁裏)とあり、「長齋」が眞神を降臨させ、道と一体となる為の修行のひとつとして考えられていたことが看取される。

(34) 名標上清…『法輪妙経』A二丁裏(テキスト3)に「致紫蘭臺金闕上清宮有瓊文紫字」と見え、太上玄一第一眞人が、紫蘭臺金闕上清宮に葛玄の名があることを述べているので、葛玄の名が標記される「上清」とは、この「紫蘭臺金闕上清宮」を指すと解釈される。

【法輪妙經A・テキスト5…三丁表10(三丁裏7)】

太上玄一第三真人眞定光告左仙公曰、

「子七世有惠、割口救窮、仁及鳥獸、福流後代、潤灑子身。子又積勤、躬奉師實、寒不思裘、饑不爽口、艱苦林岫、注心不替、紫藏納眞、項生奇光、致高上曲降、錫加仙卿、以酬昔德。豈不巍巍乎。太上今命我爲子第三度師。今當告子「無量妙通轉神入定勸戒要訣」。子欲宗之乎。吾當說之、子閉口修之焉。」

【法輪妙經A・テキスト5訓読】

太上玄一第三真人眞定光が左仙公に告げて曰く、

「子の七世に恵み有り、口を割き窮するを救ひ、仁は鳥獸に及び、福は後代に流れ、子の身を潤灑す。子も又勤を積み、躬して師實を奉じ、寒さに裘を思はず、饑えに口を爽らず、林岫に艱苦し、心を注ぎて替へず、紫藏に眞を納むれば、項に奇光を生じ、高上曲降し、錫ひて仙卿に加へ、以て昔德に酬いるを致す。豈に巍巍たらざらんや。太上今我に命じて子の第三度師と爲さしむ。今當に子に「無量妙通轉神入定勸戒要訣」を告ぐべし。子は之を宗はんと欲するや不や。吾當に之を説くべし、子は口を閉じて之を修めよ」と。

【法輪妙經A・テキスト5現代語訳】

太上玄一第三真人眞定光は左仙公に告げて次のように言った。

「そなたの七世の先祖には思いやりが有り、自分の食べる物を割いて窮乏するものを救い、その仁徳は鳥獸にまで及び、その福德は子孫に流れ及んで、そなたの身を潤し（幸いを）そそいでいる。そなたもまた努力を積み、身を低くして宝である師を敬慕し、寒くても（防寒着である）毛皮の衣を着たいと思わず、ひもじくても（修行で）禁止されている物を食べたりせず、奥深い山中で辛く困難な思いをしながらも、心を集中させて心変わりすることなく、紫藏に眞を納めたので、うなじに不思議な光が生じ、高位の天真（太極真人徐來勒）が降臨し、（法位を）与えて仙卿の一人に加え、それによってこれまでの過去世の徳に報いたのである。どうしてこのことが高大ですばらしいことでないことがあるのか。太上大道君は今、私に命じて（私を）そなたの第三度師とした。今まさにそなたに「無量神通轉神入定勸戒要訣」を教えようと思う。そなたはこれ（無量神通轉神入定勸戒要訣）をつつしんで受けようと思うか否か。私がそもそもこれを教説するからには、そなたは口を閉じてこれを修めるようにせよ」。

【法輪妙經A・テキスト5語釈・注釈】

○この部分の、「太上玄一第三真人」から「無量神通轉神入定勸戒要訣」までは、『無上秘要』（HY一一三〇）巻三四「師質品」に『洞玄法輪經』として引く。

(35) 子七世有恵…ここでの「七世」とは、葛玄の七代までの先祖の意味で用いられている。このように、「七世」を七代の先祖とする用例は、道教經典に散見する。これは仏教の「七世父母」に由来すると考えられて

いるが、仏教の「七世父母」は、過去世の各世に於ける自己の「所生父母」、即ち、七度転生することに関わった、自分をこの世に生み出す存在としての父母を指すのに対し、中国ではこれが過去七代の先祖の意味に取られるようになった為、道教でもそのような中国的な解釈で「七世」という語を用いていることは、つとに指摘されている。(小林正美『中国の道教』(一九九八年、創文社)第二章第三節三「三途(死者の世界)」参照。)また、神塚淑子氏は、『法輪妙経』Aの、葛玄に七世の祖先の福德が及んでいると述べる「七世有恵」から「潤灑子身」までの部分について、『眞誥』(HY一〇一〇)巻四「運象篇第四」の十一丁に見える、許謚・許邁兄弟の七世の祖先である許肇について述べるくだりを意識している可能性を指摘しており、『法輪妙経』について、上清経の影響もあることに言及している。(神塚淑子(注釈(1)前掲書)『道教経典の形成と仏教』第一篇第三章一を参照。)

(36) 饑不爽口・「爽」には、「やぶる/たがふ」という意味がある。道教でも仏教と同様、食事に関する禁忌や規則があり、例えば、古靈宝経のひとつ、『太極真人敷靈寶齋戒威儀諸経要訣』(HY五三二)には、靈宝齋を行う際の食事の取り方の規則として、「過中聽飲、清飲而絶食、平旦飲粥、日中菜食(過中は飲すること、清飲して食を絶ち、平旦は粥を飲み、日中は菜食す)」云々(二一丁裏)と、齋を行っている間は水だけは飲んでよいが絶食し、早朝は粥を摂り、日中は菜食することを記している。また、上清経のひとつ、『洞真太上八素眞経服食日月皇華訣』(HY一三二二)には、符法における禁忌として、「行此道慎殄穢勿食五葷(此の道を行うに、殄穢を慎み五葷を食する勿れ)」(六丁表)と見える。この他、『抱朴子・内篇』(H

Y一七七) 卷四「金丹篇」にも、煉丹の際に、五辛(臭気の強い五種の野菜。五葷に同じ)や生魚を食べないという食の禁忌が見える。(注釈(9)参照。)このような例から見て、「口をやぶる」ことは、即ち、そのような修行上の食の禁忌をやぶることを指していると推察される。ここでは、そのような修行上の食の禁忌をどんなに空腹でも守ったことを言っていると解釈し、現代語訳した。

- (37) 紫藏納真…『正統道藏』所収の道教經典では、「紫藏納真」という用例は『法輪妙經』Aに見えるものだけのものである。「紫藏」の用例については、例えば『太真玉帝四極明科經』(HY一八四) 卷二に「若有玄圖玉名、金骨紫藏、當得此文。得者神仙白日昇天(若し玄圖玉名、金骨紫藏有れば、當に此の文を得るべし)。得る者は神仙となり白日昇天す」(四丁表)、卷二に「若有玉骨紫藏、名書青宮者、三百年内聽得一傳(若し玉骨紫藏有り、名は青宮に書さるる者は、三百年内に一傳を得るを聽す)」(九丁裏)とある。また、『無上秘要』(HY一三〇) 卷九七「玉清品下」の「廻神飛霄登空招五星上法」の末尾に、「高聖帝君曰、凡有玉骨丹文、列名帝圖、得見七聖玄紀。凡有金髓紫藏、名題金札、得見隱書内文(高聖帝君曰く、凡そ玉骨丹文有り、名は帝圖に列ぬれば、七聖玄紀を見るを得ん。凡そ金髓紫藏有り、名は金札に題さるれば、隱書内文を見るを得ん)」云々(七丁表)と見える。これらから、「紫藏」とは、仙人になる資格となる条件を具えた内臓、おそらくは五臓のことである、と推測される。例えば『太上洞玄靈寶投簡符文要訣』(HY三九五)の「北方赤書玉文」の祝文の中に、「五府納真、上通神明、五老降接(五府眞を納めれば、上神明に通じ、五老降接す)」云々(二三丁裏)とあり、五府、即ち五臓に眞を納めることが見える。

(38) 高上曲降…ここでは、「高上」を「高位の天真」と訳したが、太上玄一第三真人は、「致高上曲降、錫加仙卿、以酬昔德」と言った後、「太上令我爲子第三度師。今當告子「無量妙通轉神入定勸戒要訣」。子欲宗之不乎」と続け、要訣の伝授について、「今」という表現をしている。ここから、「高上曲降」は以前のことであり、また、太上玄一真人が自身を「高上」と呼ぶことは考えられないので、この「高上」は太上玄一真人より前に葛玄に降臨した「太極真人徐來勒」を指すと解釈し、(太極真人徐來勒)と補った。

〔法輪妙經A・テキスト6…三丁裏8〜四丁表9〕

太上玄一真人曰、

「夫天地建立、元始分判、⁽³⁹⁾陰陽開化、五行列位、無上無下、無天無地、無大無小。無色之内、無形之外、⁽⁴⁰⁾皆稟受空洞、以氣爲宗。⁽⁴¹⁾宗生於始、始生於元、元生於玄、三生萬物、莫不相承。⁽⁴²⁾綱維八極、致天地長存、衆眞・高仙・十方已得道、四方無極世界塵沙而來。⁽⁴³⁾眞人從無數劫來、莫不有師。皆從師奉受上清三洞寶經、⁽⁴⁴⁾而得爲高仙・上聖・十方導師也。師者寶也。⁽⁴⁵⁾爲學無師、道則不成。⁽⁴⁶⁾非師不行、非師不生、非師不度、非師不仙。故師我父也。子不愛師、道則不降、⁽⁴⁷⁾魔壞爾身。八景龍輿焉可得馭。太極玉闕焉可得登。⁽⁴⁸⁾

【法輪妙経A・テキスト6訓読】

太上玄一真人曰く、

「夫れ天地建立し、元始分判し、陰陽開化し、五行位を列ぬるに、上と無く下と無く、天と無く地と無く、大と無く小と無し。無色の内、無形の外、皆な空洞を稟受し、氣を以て宗と爲す。宗は始より生じ、始は元より生じ、元は玄より生じ、三は萬物を生じ、相ひ承けざるは莫し。八極を綱維し、天地長存を致せば、衆眞・高仙・十方の已得道、四方無極世界の塵沙にして來る。眞人は無数の劫よりこのかた、師の有らざるは莫し。皆な師に従り上清三洞寶經を奉受し、而して高仙・上聖・十方導師と爲るを得るなり。師とは實なり。學を爲すに師無くんば、道則ち成らず。師に非ざれば行はれず、師に非ざれば生じず、師に非ざれば度さず、師に非ざれば仙ならず。故に師は我が父なり。子師を愛さずんば、道は則ち降らず、魔は爾の身を壞す。八景の龍輿焉ぞ馭するを得るべけん。太極の玉闕焉ぞ登るを得るべけん。」

【法輪妙経A・テキスト6現代語訳】

太上玄一真人が次のように言った。

「そもそも天地ができ、元始（始原の時）が分れて流れ始め、陰陽が変化を始め、五行（五氣の働き）が定まるのに、上も無く下も無く、天も無く地も無く、大も無く小も無かった。色も無く、形も無い状態で、（それらのこととは）皆な空洞（の生成変化の作用）を受け、氣をもってその宗おおもととした。宗（たる氣）は始（氣）より生じ、

始(氣)は元(氣)より生じ、元(氣)は玄(氣)より生じ、(玄元始の)三(氣)は万物を生じ、互いにその働きを承けないものはない。世界の八方全土を太い綱でつなぎとめて、天地が長く存在できるようにすると、あまたの真人や高位の仙人や世界のあらゆる場所の巳に道を得た者たちが、四方無極世界の塵や砂のような数となってやって来た。真人には無数の劫という非常に長い時以来、師のいない者は無い。皆な師により「上清三洞寶經」をつつしんで受け、そうして高仙や上聖や十方導師となることができたのである。師とは宝である。道を学ぶのに師がいなければ、道(の教え)は成就しない。(道の教えは)師でなければ行われず、師でなければ生じず、師でなければ悟りの岸へ渡すことはできず、師でなければ仙人にすることはできない。それゆえ師は自分の父のような存在である。子(弟子)が師を愛さなければ、道(の教えを説く天真)は降臨せず、魔がその身を損なうだろう。(そのようであれば、天上界の乗り物である)八景の龍輿もどうして操り方を会得できようか。(天界の)太極宮の玉闕にもどうして登ることができようか。

〔法輪妙經A・テキスト6語釈・注釈〕

(39) 元始分判…ここに見える「元始」は「分判」するものであるから、元始天尊のような神格を表す語ではなく、宇宙の生成について語られる文脈上、字義から考えて、始原の時の表現と見ることができ。始原の時間が「分判」するとは、時間が流れ始めたこと、と解釈できる。時間は流れ始めると同時に、現在を起点として過去と未来に時を分かつかからである。「天地」が建立することと空間(宇)ができ、「元始」が分判するこ

とで時間(宙)が生じ、ここに「陰陽」が変化を続け、五気の働きである「五行」が定まる時空の枠組みが整う。ここではこのように解釈し、現代語訳に反映させた。陸修静は、『法輪妙経』を元始天尊が教説する靈宝経である「元始旧経」に分類しているが、道蔵本『法輪妙経』には「元始天尊」は登場しない。しかし、「元始天尊」が「元始」即ち、宇宙の始まりの時の、原初の氣と結びついた神格であることを考えると、陸修静が、「元始分判」や、或は『法輪妙経』Bに見える「元始同生」(六丁裏)という表現中の「元始」の語に、「元始天尊」の存在を観ていた可能性は十分考えられる。「元始天尊」という神格については、王承文(注釈(29)前掲書)『敦煌古靈寶経與晋唐道教』第六章第一節、同氏『漢晋道教儀式與古靈寶経研究』(中国社会科学出版社、二〇一七年)第三章第二節、神塚淑子(注釈(1)前掲書)『道教経典の形成と仏教』第二篇第二章二、劉屹(注釈(25)前掲書)『六朝道教古靈寶経的歴史學研究』上篇第四章第二節などの先行研究がある。陸修静の古靈宝経の分類については、林佳恵(注釈(3)前掲書)『六朝江南道教の研究』第一篇第一章を参照。

(40) 無色之内、無形之外…「色」は外にあらわれた形や様子のことであり、「形」とはものが目に見える状態を伴うことである。ここでは、目に見えるものとしての形などがあらわれていない状態、目に見えるものが何もない状態の表現と解釈される。また、これはすぐ後に見える「空洞」の状態を表現したものと考えられる。注釈(41)参照。

(41) 空洞…『三天内解経』(HY一一九六)巻上の二丁に見える宇宙生成論では、「道氣↓幽冥↓空洞↓太無↓玄

元始三氣」という宇宙の生成過程が説かれる。「空洞」については、「幽冥之中、生乎空洞。空洞之中、生乎太無。太無變化玄氣・元氣・始氣三氣（幽冥の中、空洞を生ず。空洞の中、太無を生ず。太無は玄氣・元氣・始氣三氣に變化す。）」(二丁裏)とあり、ここから、「空洞」は字義から推察するに、幽冥の中から生じた空間的広がりを伴う生成の一段階として考えられていると解釈される。但し、『法輪妙経』Aに見える「空洞」は、厳密には空間として解釈することが難しく、現代語訳では、生成変化の一過程と捉えて訳すことを試みた。この「空洞」を、宇宙の始原に於ける特別な空間として捉え得る例は、他の古靈宝経に見える例えば、『元始五老赤書玉篇眞文天書経』(HY二二)巻上に、「元始洞玄靈寶赤書玉篇眞文、生於元始之先、空洞之中（元始洞玄靈寶赤書玉篇眞文、元始の先、空洞の中に生ず。）」(一丁表裏)、元始五老赤書玉篇、出於空洞自然之中（元始五老赤書玉篇、空洞自然の中より出づ。）」(二丁表裏)、とある。ここでは、「元始の先」を宇宙の始まりの時と捉えると、「空洞」とは、その始原の時に於いて靈宝眞文が生じた空間と解釈できる。『太上諸天靈書度命妙経』(HY二三)の「諸天靈書度命品章」には、「二氣結空洞（二氣空洞に結ぶ）」(一五丁裏)と見え、ここでの「空洞」は、陰陽の二気が結ばれる空間と考えることができる。『洞玄靈寶自然九天生神章経』(HY三一八)の「三寶大有金書」にも「九炁出乎太空之先、隱乎空洞之中。無光、無象、無形、無名、無色、無緒、無音、無聲（九炁は太空の先に出で、空洞の中に隠る。光無く、象無く、形無く、名無く、色無く、緒無く、音無く、聲無し。）」(一丁裏二丁表)とあり、ここでの「空洞」は、宇宙生成の始めの段階で生じた九炁が隠れる空間として解釈できる。「無光」以下は、この「空洞」の描写

であると考えられる。(※魏晋南北朝時代の宇宙生成論に関する主要な先行研究については、注釈(15)前掲書『氣の思想』第二部「儒仏道三教交渉における氣の概念」、及び麥谷邦夫論文「道教的生成論の形成と展開」を参照のこと。)

(42) 以氣爲宗・「宗」はおおもと、即ち中心となるもの、または中心となるものとして重んずるものの意。ここでは、「氣」が世界のおおもととなる、という考えが示されている。因みに、『老子』第四章に、「淵兮似萬物之宗(淵として萬物の宗に似たり)」とあり、「宗」を万物を生み出すおおもとの意とする用例が見える。

(43) 宗生於始、始生於元、元生於玄、三生萬物、莫不相承…ここでは、宇宙生成における玄元始三氣の思想が見える。先に注釈(15)、(41)に挙げた『三天内解經』(HY-1196)巻上では、玄元始三氣は、太無が変化して三つの氣となる、と考えられており、玄元始三氣は太無から同時に変化して生じたものである。それに対し、ここでは、玄元始三氣は、玄氣↓元氣↓始氣という生成過程を経て、世界のおおもととなる氣、「宗」を生み出すという図式になっている点が注目される。また、「三生萬物」の「三」については、文脈から玄元始三氣の「三」と解釈して、(玄元始)三氣から万物が生じる、と訳した。即ち、現時点での解釈では、玄元始三氣は、玄氣↓元氣↓始氣という生成過程を経た後、同時に存在して万物を生み出す、ということになる。また、『法輪妙經』Aに見える宇宙生成論の特色としては、一般の宇宙生成論が世界の成り立ちを説き明かそうとするものであるのに対して、『法輪妙經』という經典自体の神聖性や正統性を説くものとなっていることが指摘できる。宇宙生成論に関する先行研究については、注釈(15)、(41)参照。

(44) 四方無極世界塵沙而來…「無極世界」という観念は、『法輪妙経』Cにも見え、そこでは神格である「道」が、八門出遊して、八方位に在る「無極世界」を歴観するという内容になっている。(※ここに見える「道」に関連して、『元始無量度人上品妙経四註』(HY八七)卷三の嚴東注に「太上道君、開於八門」云々(二二丁裏)とあり、八門を開く神格は「太上道君」(太上大道君)として解釈されている。注(2)参照。)そこでの「無極世界」は、死者の領域、仏教的に言えば地獄のような設定となっている。同様の、地獄のような「無極世界」の観念は、『洞玄靈寶長夜之府九幽冥玉賈明真科』(HY一四〇〇)や、『太上洞玄靈寶智慧罪根上品大戒経』(HY四五七)巻下にも見える。『法輪妙経』Aでは四方、即ち東西南北のあらゆる方向にある無極世界の塵や砂に例えられるような途方もない数の「衆眞・高仙・十方已得道」が、天地が定まると集まって来たとして述べているので、ここでの「四方無極世界」が、『法輪妙経』Cや、上掲の古靈宝経に見える地獄のような場所を指す語として用いられているとは考え難い。よって、ここでの「四方無極世界」は、取りあえず、現代語訳では敢えて訳さず、「四方無極世界」のままとした。

(45) 上清三洞寶経…道蔵本『法輪妙経』四篇では、經典に言及する部分は、すべて『法輪妙経』に関するものであり、經典の『法輪妙経』以外の表記が見えるのは、この一か所である。「上清三洞寶経」が具体的に何を指すかが問題であるが、『自然経訣』(ペリオ二四〇三)に、「仙公曰、靈寶文亦包諸経、可名三洞法師也(仙公曰く、靈寶文も亦た諸経を包めば、三洞法師と名づくべきなり)」「中華道蔵」第四卷、九八頁上段)という記述がみえる。ここでは、靈宝経は諸経を包括するので、靈宝経の法師を三洞法師と名づけるこ

- とができる、としている。『法輪妙経』Aの冒頭で、靈宝経の伝授者である葛玄が「三洞大法師」に保举されているのも、おそらく、『自然経訣』に見えるこのような考え方に依るものと考えられる。(注釈(29)参照)更に、『自然経訣』の巻末には、天台山で葛玄が弟子たちに靈宝経を伝授する場面が記されているが、そこでは、「仙公告曰、我日所受上清三洞太真道經。吾去世之日、一通副名山洞臺、一通傳弟子、一通付吾家門子弟(仙公告げて曰く、我受くる所の上清三洞太真道經を曰ふ。吾世を去るの日、一通は名山洞台に副へ、一通は弟子に傳へ、一通は吾が家門の子弟に付す)」云々(『中華道藏』第四卷、一〇〇頁下段)とあり、葛玄が太極真人徐來勒から伝授された靈宝経を弟子たちに伝授するにあたり、靈宝経に対して「上清三洞太真道經」と表現している。これらから類推したことに加え、道藏本『法輪妙経』が他には『法輪妙経』以外の經典に就いては述べていないことから推測するに、『自然経訣』に見える例と同じように、『法輪妙経』Aでも、靈宝経、より具体的には『法輪妙経』を「上清三洞寶經」と表現している可能性も考えられる。但し、これだけで断定するには検証が不十分である為、現代語訳では、そのまま「上清三洞寶經」とした。「上清三洞寶經」に言及する主な先行研究としては、王宗昱(注釈(11)前掲書)『道教義樞』研究』第三章第一部、呂鵬志『唐前道教儀式史綱』(二〇〇八年、中華書局)二四一〜二四二頁の注②、劉屹(注釈(25)前掲書)『六朝道教古靈寶經的歷史學研究』下篇八章第二節『古靈寶經中的「三洞說」』がある。
- (46) 師者寶也…注(32)を参照のこと。ここでは道教の三宝のひとつ、師宝として、師は宝であると述べる。
- (47) 道則不成…「道」には、本来の理法としての「道」と、そこから展開した神格としての「道」の二つの用法

がある。四丁表には、二つの「道」の用例が見える。「道則不成」の「道」はその前の「爲學無師」を受けていて、学ぶ対象としての「道」は、師がいなければ成就しない、と述べていることから、この「道」とは理法の意味で用いられていると解釈できる。

(48) 道則不降…「道則不成」に対し、こちらの「道」は、その前の「子不愛師」を受けていて、弟子が師を敬愛しない場合、「道」が降ってこない、と述べている。『法輪妙経』Aの三丁表(テキスト4)で太上玄一第二真人が、葛玄が「欽仰師寶」、即ち、師を尊敬し慕ってきたことを述べており、その葛玄のもとに三真人が降ることから類推して、師を敬愛していない弟子には降ってこない「道」とは、神格としての「道」の意とも取れるが、具体的には「道」の教えを説く為に降って来る「天真」のことを指すとも解釈できるので、そのように補って現代語訳した。

(49) 太極玉闕…「太極」は天上界に在る宮殿のこと。『法輪妙経』Aの四丁裏(テキスト7)に見える「太極之宮」に同じ。「玉闕」は宮殿の門の美称。天上界の美しく立派な太極宮殿の門の意。

〔法輪妙経A・テキスト7:四丁表9〜四丁裏10〕

儒教則有三墳五典、八索九丘⁽⁵⁰⁾。皆以師訓文學之士、尚復承師、以致明達。況子今學上清之道⁽⁵¹⁾、希求昇騰永享無量之福乎。慢師行道、求肉飛之舉、謂投之夜光⁽⁵²⁾、失爾一往也。但子積劫勤尚、展轉不倦、功滿德就、瓊文紫字列於

玄臺^(5.5)、位登太極仙公之任。而三師不備、勸戒未充於格、未得便登太極之宮也。太上以子宿勲高重故、命我等爲子三師、度子要訣、以成子道、使子速得飛騰^(5.5)三界、遊乎上清、身詣金闕^(5.5)、受號仙公也」。仙公唯唯伏受誨命、惟願天尊哀而矜愍^(5.7)。今爲說之、即奉之焉。

〔法輪妙經A・テキスト7訓読〕

儒教に則ち三墳五典、八索九丘有り。皆な師を以て文學を訓^びふるの士すら、尚ほ復た師を承け、以て明達を致す。況んや子今上清の道を學び、昇騰し、永に無量の福を享くるを希求せんをや。師を慢^りりて道を行ふは、肉飛を求むるの擧、之に夜光を投ずと謂ひ、爾の一往を失ふなり。但だ子は劫を積み勤めて尚^び、展轉して倦まざれば、功滿ち徳就き、瓊文紫字は玄臺に列なり、位は太極仙公の任に登る。而るに三師備はらず、勸戒未だ格を充たさず、未だ便ち太極の宮に登るを得ざるなり。太上は子の宿勲の高く重きを以ての故に、我等に命じて子の三師と爲し、子に要訣を度し、以て子の道を成じ、子をして速やかに三界を飛騰するを得て、上清に遊び、身は金闕に詣り、仙公を受號せしめんとするなり」と。

仙公唯唯として伏して誨命^{かひめい}を受け、惟だ天尊哀みて矜愍^{きんびん}するを願ふ。今爲に之を説き、即ち之を奉ずるなり。

〔法輪妙經A・テキスト7現代語訳〕

儒教には三墳五典や、八策九丘といった古書が有る。師（の教え）を以て文學を物事の筋道を通して教える知識

人たちは、なおかつ師（の教え）を継承して、それにより明らかな道の理（ことわり）に達するのである。ましてそなたが今上清の道（である法輪妙経）を学び、空へ上昇し永遠に量り知れない幸福を授かることを希み求めるのであれば、（師が大切な存在であることは）言うまでもないではないか。師をあなどつて道（の教え）を行なおうとすることは、（仙人ではない）生身の身体で空を飛ばうとするような行為であり、貴重なるものを（暗闇で）投げつけるようなことであり、そなたのすべてを失うことである。但だそなたは非常に長い時間を積んでいそしみたつとび、幾度も転生して（修行を）倦むことがなかったので、功德は満ちて成就し、神々しく美しい天上界の文字（で仙人になる者として記された名前）が天上界の玄臺に列ねられ、位は太極仙公の任に登った。けれども三師が備わっておらず、（受ける）勸戒もまだ条件を充たしていないので、いまだにつまりるところ（天上界の）太極の宮に登ることができないでいる。太上（大道君）はそなたの前世からの勲しがすぐれて重んじられるものであることから、我等に命じてそなたの三師とし、そなたに要訣を伝度し、それによってそなたの求道を成就させ、そなたを速やかに三界の上へ高く飛び去らせ、上清（の天上界）に遊ばせ、その身を（天上界の）宮殿の金の門に至らせ、仙公の号を受けさせようというのである」。

仙公はかしまつて地に伏して天真が教え諭す言葉を受け、惟だ天尊（たる三真人）が哀れみ慈愛の心で（自分のことを）思ってくれることを願った。（玄一真人が）今その為に要訣を説くと、（仙公は）そのまますぐに真人が教説した要訣をつつしんで受けたのである。

【法輪妙經A・テキスト7語釈・注釈】

(50) 三墳五典、八索九丘…いずれも伝説上の古書の名で、現存しない。「三墳・五典・八索・九丘」については諸説あるが、『尚書正義』卷一に、『春秋左氏傳』昭公十二年の、楚の靈王が史官の倚相という人物を『三墳』・『五典』・『八索』・『九丘』をよく読むといつて稱賛したという記述に言及して、「春秋左氏傳曰。楚左史倚相、能讀三墳・五典・八索・九丘。即謂上世帝王遺書也（春秋左氏傳に曰ふ。楚の左史倚相、能く三墳・五典・八索・九丘を読む。即ち上世帝王の遺書を謂ふなり）」とあり、これらの書が上古の世の帝王が残した書であると述べている。また、この文の前には、「八卦之說。謂之八索。求其義也。九州之志。謂之九丘。丘聚也。言九州所有、土地所生、風氣所宜、皆聚此書也（八卦の說。之を八索と謂ふ。其の義を求むるなり。九州の志。之を九丘と謂ふ。丘は聚なり。言ふところは九州の有る所、土地の生ずる所、風氣の宜する所、皆な此の書に聚むるなり、と）」とあり、『八索』は八卦に関する書であり、『九丘』は九州全土、即ち中国の地理に関する事柄を集めた書であると説明されている。（中華書局『十三經注疏』（縮小版）『尚書正義』卷一第二頁中段を参照。）

(51) 上清之道…ここで葛玄が学ぶ「上清の道」とは、玄一真人によつて授けられる『法輪妙經』及びそこに説かれる教えを指す、と解釈される。

(52) 投之夜光…典拠は、司馬遷『史記』列伝第二三に見える鄒陽の伝で、斉の人、鄒陽が遊歴中、梁の国で無実の罪で捕えられた時、自分の無実を訴える為に上書した文章中の「すばらしい明月の珠や夜光の璧のよう

な宝物であっても、これを暗闇で人に向かって投げれば、投げつけられた者は、それが大変に価値あるものだとはわからない為、剣に手をかけて睨みつけるだろう」というくんだりと考えられる。「臣聞名月之珠、夜光之璧、以闇投入於道路、人無不按劍相盼者（臣聞くならく名月の珠、夜光の璧、以て人に道路に闇投せば、人の劍を按じ相ひ盼まざる者無し、と）。」『史記』卷八十三、中華書局、二四七六頁。現代語訳では、『史記』の記述により「暗闇で」と補って訳した。現在の中国語では、これは「明珠暗投」という四字熟語となっており、日本語の「猫に小判」のような意味で、貴重なものがその価値を理解できない者の手に在ることと言う場合にも使われる。ここでは、道の教えを学びながら、師をあなどる行為に対して、それを批判する表現として用いられている。

(53) 瓊文紫字、列於玄臺…先に二丁裏で「致紫蘭臺金闕上清宮有瓊文紫字」とあり、葛玄の名が紫蘭臺金闕上清宮に有ることを述べている。このことから、「瓊文紫字」が列なる「玄臺」とは、即ち紫蘭臺を指すと推定できる。「瓊文紫字」については、注釈(27)参照のこと。

(54) 太極之宮…天界にある宮殿の名。仙公の法号を受けるために登る場所として設定されている。葛玄が受号の為に赴く天界の場所については、注釈(56)参照。

(55) 飛騰三界…「飛騰」は「飛揚」に同じ。高く舞い上がるさま。『法輪妙経』Aでは、葛玄は先に太極真人徐來勒により、三洞大法師を拜しているが、また仙公の号を受けておらず、天台山中で修行を続けている、という設定になっている。これは、葛玄が地仙のままであることを婉曲に表現しているとも取れる。この経典

が主張するのは、葛玄は、三師が備わり、要訣が伝授されれば、「三界」から高く舞い上がって、天界の高位ところに登り、仙公の号を受ける存在である、ということである。「三界」の語自体は、仏教用語の「三界」・「色界」・「無色界」の「三界」の借用であるが、ここでは仙公の号を受け、上位の神仙となる以前の葛玄のいた場所を表現する語であると解釈される。

(56) 遊乎上清、身詣金闕…『法輪妙経』Aの二丁裏(テキスト3)に、葛玄の長年の修行と善行、それにより積んだ功德が上位の神仙と同レベルのものであることが述べられ、そのことによって、葛玄の名が天界の「紫蘭臺金闕上清宮」に標記されていることが述べられている。仙公の号を受けるべく、葛玄が赴く「遊乎上清、身詣金闕」と表現される場所も、彼の名が既に記されているという天界の同じ場所であると考えられる。

「金闕」は宮殿の門の美称。ここでは、天界の宮殿の門のこと。四丁表に見える「玉闕」に同じ。注釈(49)参照。

(57) 惟願天尊哀而矜愍…ここに見える「天尊」も、「元始天尊」のことではなく、『法輪妙経』Aの中で、葛玄が太上玄一三真人に対して用いる呼称である。このような高位の天真に対する呼びかけに用いる「天尊」の語に関しては、注釈(25)、(68)参照。

〔法輪妙經A・テキスト8:五丁表1〜五丁裏1〕

太上玄一真人曰、

『太上眞一勸誡法輪妙經』、九天有命、皆四萬劫一出。太上虛皇⁽⁵⁸⁾、昔傳太上大道君⁽⁶⁰⁾、道君傳太微天帝君⁽⁶¹⁾、天帝君傳後聖金闕上帝君⁽⁶²⁾、令付仙卿・仙公・仙王・已成真人。不傳中仙及五嶽諸仙人也⁽⁶³⁾。自無玄名帝圖錄字・三清太極玉文、自非仙公之質、不得參聞。此經高妙、太上所重、藏之六合紫房之內⁽⁶⁴⁾、仙童仙女、恒寶祕侍眞。有盼其篇目、慶延七祖、死魂生天、福覆一宗、門戶隆盛、世出賢明。修之致雲輿・龍駕、白日飛行。輕泄漏慢、謗毀聖文、考罰爾身、罪福報對。明慎之焉。

〔法輪妙經A・テキスト8訓読〕

太上玄一真人曰く、

『太上眞一勸誡法輪妙經』、九天に命有り、皆な四萬劫に一たび出づ。太上虚皇、昔太上大道君に傳へ、道君は太微天帝君に傳へ、天帝君は後聖金闕上帝君に傳へ、仙卿・仙公・仙王・已成の真人に付さしむ。中仙及び五嶽諸仙人には傳へざるなり。自ら玄名の帝圖録字・三清太極玉文に無くんば、仙公の質に非ざるよりは、參聞するを得ず。此の經は高妙にして、太上の重んずる所、之を六合紫房の内に藏し、仙童仙女、恒に寶として祕し眞に侍す。其の篇目を聆ること有れば、慶は七祖に延べ、死魂は天に生じ、福は一宗を覆ひ、門戶は隆盛し、世に賢明を出だす。之を修むれば雲輿・龍駕を致し、白日に飛行す。輕泄し漏慢し、聖文を謗り毀たば、爾の身は考罰

せらる。罪福は對に報ゆ。明らかに之を愼しめ」と。

【法輪妙經A・テキスト8 現代語訳】

太上玄一真人は次のように言つた。

『太上眞一勸誡法輪妙經』は、九天（天界）に決まりが有り、皆な四萬劫に一度出現する。太上虚皇は、昔太上大道君に伝え、道君は太微天帝君に伝え、天帝君は後聖金闕上帝君に伝え、仙卿・仙公・仙王・已に真人となつた者に伝えさせた。中位の仙人及び五嶽諸仙人には伝えなかつた。自然の道理として（自分の）玄名が帝國録できない。この経はこの上なく尊いものであり、太上（大道君）が重んじているものであるので、これを（天上界の）六合紫房の内に収蔵し、仙童仙女が、恒に宝として秘蔵してこの真経に侍っている。その篇目を見ること
が有れば、（それだけで）その慶（さいわい）は七代の先祖にまで及び、（先祖の）死魂は天上界に生れ変わり、幸福は一族の者を覆い、その家門は隆盛となり、世の中に賢く明晰な者を輩出する。この経を修めれば（天上界の乗り物である）雲輿・龍駕がやって来て、白日に空を飛んで昇天する。（この経を）軽々しく他の人に漏らしたりあなどつたりし、（経の）神聖な文を誇つたり損なつたりすると、そなたの身は厳しく罰せられる。（以上述べてきたように）罪（となる行いや）福（となる行い）はそれに対する報いを受けることになる。はつきりとこのような（経を軽んずる）ことは愼むようにするのだ」。

『法輪妙經A・テキスト8語釈・注釈』

○『無上秘要』(HY二一三〇)卷三二の「傳經年限品」に、『洞玄法輪經』として「九天有命、皆四萬劫一出」の部分を引き。また同卷「衆聖傳經品」に同じく『洞玄法輪經』として「太上玄一真人曰」から「不傳中仙」までを引く。但し、「衆聖傳經品」の引文は、「九天有命、皆四萬劫一出」の部分及び「及五嶽諸仙人也」の部分が無い。また、『法輪妙經』Aでは「令付仙卿」の「令」字を「命」字に作る。ここでは、現行テキストの記述に従う。

(58) 九天…『法輪妙經』Aには、三丁裏から四丁表(テキスト6)にかけて、「玄元始三氣」の説を含む宇宙生成論が見えるが、ここでの「九天」は、そのような宇宙生成論中の三氣・九氣と関わる天のことではなく、九層の天、即ち天上の高いところにある天界を指す、と解釈できる。(なお、道教における天界説については、代表的な先行研究として、麥谷邦夫氏の論文「道教における天界説の諸相―道教教理体系化の試みとの関連で」(『東洋学術研究』二七号、一九八八年がある。同論文は、同氏の『六朝隋唐道教思想研究』(二〇一八年、岩波書店)に、第二部第一章「道教教理における天界説」として収録。)

(59) 太上虚皇…道藏本『法輪妙經』では、經典伝授の系譜の最上位にある神格。本来、上清経の神格であり、例えば『上清太上八素眞經』(HY四二六)に「太上虚皇道君」(七丁裏)、『上清太上帝君九眞中經』(HY一三六五)巻上に「虚皇」(八丁裏)などと見える。靈宝經典中に多くの上清経の神格が見えることは、ロケネ(Isabelle Robinett)氏を始めとする諸先学により、つとに指摘されている。古靈宝経では、道藏本

『法輪妙経』の他、例えば『太上洞玄靈寶智慧本願大戒上品經』(HY三四四)に、「太上虛皇道君」(一丁裏)、「太上虛皇」(八丁表)、「高上大道虛皇」(九丁表)、また『太上洞玄靈寶本行宿緣經』(HY一一〇六)に「虚皇」(六丁表)、「太上玉晨大道虚皇」(十三丁表) という神格名が見えるが、いずれも同じ「太上虚皇」という神格を示している。(道教の神格に見える、靈宝經と上清經の密接な関係については、以下を参照。Isabelle Robinett, *Taoism: Growth of a Religion*, translated by Phyllis Brooks, 1997, Stanford University Press, Stanford, California, 6. The Lingpao school pp.158-162 / (同) *La révélation du Shangqing Dans L. Histoire Du Taoisme*, publications École Française D. extrême-Orient, vol. CXXVII, Paris, 1984, p.194)

(60) 太上大道君: 「太上虚皇」と同じく、上清經に見える神格。『上清太上帝君九真中經』(HY二三六五) 卷下に「太上大道君」(二丁裏)、『太上三天正法經』(HY一一九四)に「太上大道君」(二丁表)、『洞真太上八素真經服食日月皇華訣』(HY一三二二)に「高上玉晨太上大道君」(二丁裏)などに見える。『法輪妙経』Aでは、葛玄に降った太上玄一三真人に直接、命令を下す立場にある神格として考えられている。他の古靈宝經、例えば『上清太極隱注玉經寶訣』(HY四二五)や『太上洞玄靈寶本行宿緣經』(HY一一〇六)では、「太極真人徐來勒」の上位の神格として見え、『太上洞玄靈寶真文要解上經』(HY三三〇)では、「元始天王」の低位の神格として登場する。また、「元始天尊」所説の靈宝經では、例えば『太上洞玄靈寶赤書玉訣妙経』(HY三三二二)には、「元始天尊」の低位の神格として見える。『法輪妙経』Aで散見する「太上」は、「太極真人徐來勒」との関係から、「太上大道君」を指すと解釈され、同時にこの「太上」は、太上玄一三

眞人とも師弟関係にあることが同經典には示されている。また、「太上大道君」は、「太上無極大道君」とも表記される。これについては、注釈(65) 参照。

- (61) 太微天帝君…上清経に見える神格で、太上大道君の下位の神格。『洞真太上紫度炎光神元變經』(HY一三二二)を始め、多くの上清經典に登場する。また、『法輪妙経』A中の太上虚皇↓太上大道君↓太微天帝君↓後世金闕上帝君天という、天上界での『法輪妙経』の伝授で示されている神々の教法伝授の系譜自体が、多く上清経に見えるものである。古靈宝経の『太上洞玄靈寶智慧本願大戒上品經』(HY三四四) 八丁表にも、『法輪妙経』Aに見えるような、上清経の神格を含む經典伝授の系譜が見える。靈宝経中に見える上清経の神々の名が列なる伝授の系譜については、神塚淑子氏の(注釈(1) 前掲書)『道教經典の形成と仏教』第一篇第三章を参照。

- (62) 後聖金闕上帝君…上清経に見える神格で、太微天帝君の下位にある。上清経では終末思想に関わる重要な神格で、更にこの神格の下位に東海青道君という神格がある。現存する古靈宝経で、『法輪妙経』以外にこの神格が見えるのは『洞玄靈寶二十四生圖經』(HY一三九六)で、その三丁表に「後聖李君」として見える。ロビネ氏により、『洞玄靈寶二十四生圖經』中に重要な上清経からの神格の借用が見えることが指摘されている。注釈(59)に挙げた同氏の著書 *La révélation du Shangqing Dans L. Histoire Du Taoïsme* (一九四頁参照)。

- (63) 不傳中仙及五嶽諸仙人也…經典伝授の資格の限定についての記述が見える『上清太極隱注玉經寶訣』(HY

四二五)や『太上洞玄靈寶真文要解上經』(HY三三〇)では、中仙以下、もしくは仙卿・仙公・仙王でない者には伝授しないと述べるに留まるが、『法輪妙経』Aでは、地上の五嶽に棲む、所謂地仙を指すと考えられる「五嶽諸仙人」も伝授の対象ではないことを明記している。これは、中仙や地仙には伝授されない『法輪妙経』が葛玄には伝授されるということを示しており、ここに楊羲の神託では不死の身、地仙に過ぎないとされた葛玄の神仙界での地位向上が意図されていることが看取される。注釈(6)を参照。

(64) 六合紫房…一丁表に、天上界における『法輪妙経』の原本の収蔵場所として、「太上六合玄臺」が見え、それと同じ場所であると考えられる。注釈(4)参照。

〔法輪妙経A・テキスト9…五丁裏2〜9〕

太上玄一真人告仙公曰、

「吾昔受太上無極大道君⁽⁶⁵⁾『真一勸戒法輪妙経』、修行奉師、一日六時、燒香朝禮旋行。皆先朝我師、心存目想、見師如經。我無有師、經則不見。既得見經、師便在前。抱饑忍渴、隨師東西。我受師訓、切勵備經。痛如刀割、尅如毒錐。俛仰伏事、恒不敢虧、痛不敢辭、毒不敢言。如此經歷四億萬年、眞道得成、位登太上玄一真人。今復被師命、爲子作三度法師。子能如我不。若能如我者、我當爲子說經」。

〔法輪妙經 A・テキスト 9 訓読〕

太上玄一真人が仙公に告げて曰く、

「吾れ昔太上無極大道君に『眞一勸戒法輪妙經』を受け、修行し師を奉じ、一日六時、焼香し朝禮し旋行す。皆な先に我が師に朝し、心に存し目に想ひ、師を見ること經の如くす。我に師有ること無ければ、經則ち見えず。既に經を見ることを得るは、師便ち前に在ればなり。饑を抱き渴を忍び、師に隨ひて東西す。我師訓を受け、切勵して經を備さにす。痛みは刀割の如く、尅するは毒錐じくばりの如し。俛仰みげようし伏して事つかへ、恒に敢へて虧かず、痛みは敢へて辭さず、毒は敢へて言はず。此くの如く四億萬年を經歷し、眞道成るを得、位は太上玄一真人に登る。今復た師命を被り、子が爲に三度法師と作る。子能く我の如くするや不や。若し能く我の如くせば、我當に子が爲に經を説くべし」と。

〔法輪妙經 A・テキスト 9 現代語訳〕

太上玄一真人は仙公に告げて次のように言った。

「私は昔太上無極大道君から『眞一勸戒法輪妙經』を受け、修行して師（太上無極大道君／太大大道君）につかえ、一日六回、焼香し師に拝礼しぐるぐると巡り歩く行をした。皆な先ず我が師に拝礼するのに、（師の姿を）心に瞑想し目に想い浮かべ、師にお目にかかるのは經に應對するかのようにした。私に師がいなければ、經には出会えなかつた。既に經に出会うことが出来たのは、師がつまりはその前に存在したからである。ひもじさを抱え

渴きに耐え、師のあとについてあちこちに行った。私は師の教えを受け、片時も休まず励んで経を一通り修めた。(その時の) 苦痛は刀で切りさかれるかのようであり、その厳しさは毒針のようであった。地に伏し天を仰いで(師に) 従い仕え、いつも強いて(励むことを) 欠かさず、苦痛は敢えて回避せず、厳しさにも敢えて(不平を) 言わなかった。このようにして四億萬年を経巡り、真の道(の悟り) を成すことができ、位は太上玄一真人に登った。今復た師の命を受けて、そなたの為に三度法師となった。そなたはよく私のようにすることができるとかどうなのか。もしよく私のようにすることができれば、私は当然そなたの為に経を説こう。

〔法輪妙經 A・テキスト9 語釈・注釈〕

(65) 太上無極大道君…五丁表に『眞一勸誡法輪妙經』が「太上虚皇」より「太上大道君」に伝授されたことが見える。その經典を「太上玄一真人」たちに伝授する「太上無極大道君」は、この「太上大道君」と同じ神格を指す、と考えられる。注釈(5) 参照。

〔法輪妙經 A・テキスト10…六丁表〕

仙公稽首禮謝、上告太上玄一真人三度法師曰、
「弟子有幸得仰對天顏、加以師訓、復教以要言⁶⁶。無量之分、豈微言所陳。自顧、稟植因緣、得生法門、少好上道、

仰希神仙、長齋幽阜⁽⁶⁷⁾。心想上聖、不悟天尊⁽⁶⁸⁾、窺盼幽谷、降教眞道⁽⁶⁹⁾。自惟闇昧、愧所不勝。然推前自期、誓心三光⁽⁷⁰⁾、躬宗師訓、不敢有虧、彌綸萬劫、情無退轉、尊奉法教、唯師是從。永願哀愍、覺所未悟、啓訓幽深、說法演誠、以見拔贖。」伏聽命旨、誓奉之焉。

〔法輪妙經 A・テキスト 10 訓読〕

仙公稽首し禮謝し、太上玄一真人三度法師に上告して曰く、

「弟子は幸有り天顔に仰ぎ對することを得、加ふるに師訓を以てし、復た教ふるに要言を以てす。無量の分、豈に微言して陳ぶる所ならんや。自ら顧みるに、因縁を植うるを稟け、法門に生まるるを得、少くして上道を好み、仰ぎて神仙を希み、幽阜に長齋す。心に上聖を想ふも、天尊を悟らざるに、幽谷を窺ひ盼て、降りて眞道を教ふ。自ら闇昧なるを惟ひ、勝へざる所を愧づ。然して前を推し自ら期し、心を三光に誓ひ、躬して師訓を宗び、敢へて虧くること有らず、綸を彌くすること萬劫、情に退轉無く、法教を尊奉し、唯だ師にのみ是れ従ふ。永に哀愍し、未だ悟らざる所を覺え、訓へを啓くこと幽深、法を説き誠を演じ、以て拔贖せられんことを願ふ」と。伏して命旨を聽き、之を奉ずるを誓ふなり。

〔法輪妙經 A・テキスト 10 現代語訳〕

仙公は額ぶき拝礼して、太上玄一真人三度法師に申し上げて次のように言った。

「弟子(である私)は幸いにも(尊い師の)御尊顔を仰ぐことができ、それに加えて師の教えがあり、また要言を教えて頂きました。量り知れない過分のことに、どうして(私が)取るに足りない言葉で述べることがありましようか。自ら顧みると、(道との)因縁を定着させることを授かり、道の教えの門に生まれることができ、若いころからすぐれた道の教えを(学ぶことを)好み、天を仰いで神仙となることを希み、人里離れた場所で長齋を行いました。心の上聖(高位の天真)のことを想っておりましたが、天尊(太上玄一三真人)のことは知ることでもなかったのに、(私のいる)暗い谷間を覗き見られて、降って来られて真の道を教えて頂きました。自分自身が道理が判らず愚かであることを考えると、愧じるばかりです。けれども前世を推しはかり自ら心に固く決め、その決心を日月星の三光に誓い、身を低くして師の教えを大切にし、強いて(修行が)おろそかになることが無いようにし、貴い教えの言葉をあまねく行き渡らせることを萬劫の長きに亘って行い、後戻りする想いは無く、道の教えを尊奉し、唯だ師にのみ従います。永く(私を)哀れみ思いやりをかけ、未だ悟っていない所を気付かせ、奥深い境地まで教えをひらかれ、道の教えを説き誠を説明して頂き、それによって(私が)罪を脱しあがなわれることを願います。」(それから、仙公は)地に伏して(天真の)命旨おんめいしを聴き、これをつつしんで受けることを誓ったのである。

【法輪妙經A・テキスト10語釈・注釈】

(66) 教以要言…この「要言」は、「太上玄一真人」が仙公に伝授する『法輪妙經』を指すと解釈される。

(67) 長齋幽阜…「幽阜」は、人里離れた場所。人のいない山中などで長期間の齋を行うことは、『抱朴子・内篇』(HY一一七七)巻四「金丹篇」に「必入名山之中、齋戒百日(必ず名山の中に入り、齋戒すること百日)」「云々(中華書局『抱朴子内篇校釈』八四〇八五頁)と見える。「長齋」については、注釈(33)を参照のこと。

(68) 心想上聖、不悟天尊…『法輪妙経』Aでは、「太上玄一真人」が降臨する以前に葛玄に降ったのが「太極真人徐來勒」であるので、葛玄はこの太極真人の存在は認識していたが、「太上玄一真人」については、この三真人が降臨するまでその存在を知らなかったことを述べている、と解釈できる。経文中、「天尊」が「太上玄一真人」への呼び掛けに用いられている呼称であることから、この「天尊」は「太上玄一三真人」を指すと考えられる。また、この「上聖」は「太極真人徐來勒」を指す可能性が高いが、「太極真人徐來勒」のみを指していると断定できない為、現代語訳では「上聖」(高位の天真)とした。「天尊」が「元始天尊」の略称ではなく、天真への呼び掛けに用いられる呼称であることについては、注釈(25)、(57)を参照。

(69) 降教眞道…この「眞道」は、三真人が降臨して葛玄に伝授した教法、即ち『法輪妙経』とその教えを指す。

(70) 推前自期、誓心三光…「推前」は、『法輪妙経』A中、真人たちが葛玄に彼の前世について告げていることから、前世のことを推し測るという意味に取った。「自期」については、『法輪妙経』Aの末尾に「誓奉之焉」とあり、葛玄が受けた教えを奉じることが誓っていることから、自ら教えを奉じることが心に堅く決めること、と解釈した。また、心を三光に誓うとは、そのように心に決めたことを守ると、不変の象徴とも言

える天上を照らす太陽や月や星の三つの光に対して誓う、即ち永遠にそのようにすると誓うこと、と解釈した。

(71) 彌綸…ここでの「綸」は「みち」と読み、「みち」即ち「道」をあまねくするとは、天真の告げる道の教えを広く行き渡らせること、と解釈した。この読み方については、『大漢和辞典』の「綸」の項の解説に、「みち、倫に通ず」とあり、『廣雅』「釈訓三」に「綸、道也」とあることを挙げていることに依る。

『太上洞玄靈寶真一勸誡法輪妙經』訳注 終